

# 教育研究業績書

2018年05月14日

所属：看護学科

資格：准教授

氏名：岩佐 真也

研究分野	研究内容のキーワード
公衆衛生看護学, 国際保健学	アウトリーチ, 受療行動, 健康格差, アフリカ
学位	最終学歴
博士 (保健学)	大阪大学大学院 医学系研究科 保健学専攻 博士後期課程

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 教育方法の実践例</b>		
1. 大学院での論文指導	2015年4月～現在	武庫川女子大学大学院看護学研究科修士課程では以下の研究題目の論文指導に携わった。 ・西宮市A地区住民の健診受診行動とその関連要因 ・運動機能向上プログラム修了後の継続した自主グループ活動における身体・心理・社会的健康の効果
2. 授業の工夫・失敗を振り返り、授業内容の見直しにつなげる	2015年4月～現在	今までの教育を振り返り、自身の教育の質を向上させるため他学部の教員の授業を参観し、またFD研修会を受講し能力向上に努めている。 受講学生からの授業アンケート結果に基づき、授業方法の改善に向け、同一科目を担当する教員で会議を持ち教授方法の検討を行っている。
3. 実習と授業・演習との連動を意識した学びを深める構造的指導	2015年4月～現在	武庫川女子大学看護学研究科の専任教員として、看護学研究保健師コースと看護学研究コースで担当した「公衆衛生看護学継続支援実習」において、乳児と高齢者への継続した家庭訪問実習を指導した。実習を通して対象者の健康状態や家族の状況、地域での暮らし、社会資源、ヘルスケアシステムを見ることにより、人々が暮らす地域で健康な生活を支援する意義を理解させるとともに、1年間の家庭訪問を継続できる対人関係能力を構築させることを目的として実施した。対象に関連づけて社会資源を理解させるため、対象者の居住地の乳児相談や高齢者のいきいき体操の場に出向く機会をつくり地域住民の行う活動についての理解を促した。その際、課題となる事象について指向的内省が行えるように、現象と理論を整理しそれぞれのがどのようにつながるかを系統立てて理解できるように工夫した。また、経験した現象を一局面で終わらせるのではなく、現象がおきる前の予防対策の視点と具体的な対策、現象後の影響と改善について、公衆衛生看護の視点で考えられるように、保健医療福祉の法律や国や地方のデータを用い、学生が自身の学びを見える化出来るように取り組んできた。
4. 演習から学位論文指導まで一貫した教育の実施	2015年4月～現在	武庫川女子大学看護学研究科の専任教員として、看護学研究保健師コースと看護学研究コースで担当した「公衆衛生看護学演習II」「広域実践看護学演習」において、実習地域である地元の地域診断を演習で行い、健康課題の解決に向けた社会経済背景および地域特性をふまえた保健活動、政策提案ができるようエビデンスとなり得るデータ収集・分析ができるような研究計画の立案を指導した。研究が対象者、対象地域の役に立つものであるためには、地域住民の実態を把握する事が必要である事から、研究実施にあたり実習市の保健センターおよび自治会役員等地域住民への聞き取りを行った。現在、自治会等への研究説明と協力依頼を進めており、地域に密着した展開を学生に学ばせている。
5. 高等学校での進学支援	2013年6月21日と2014年5月1日	文部科学省が指定するスーパーサイエンスハイスクール（大阪市立東高等学校）において、理数教育の研究と開発が推し進められている。その教育の一環として行われているレクチャー「理数大学で学ぶこと～看護保健学～」の講師として進路決定を控えた理数科3年生に対し指導した。研究の面白さ、学問のアカデミックさについて自身の研究と教育の実際を交えながら学生に分かりやすく教授した。学生からはたくさん質問が出た。科学的思考とそれを基にした人類に寄与する研究の重要性を学生は学びとっていた。
6. 高等学校での就職支援	2012年5月11日	大阪府立桜塚高等学校にて、進路指導ガイダンスを行った。将来看護職を目指す学生に対し、看護職に求められる資質について概説し、看護系大学入学後の学習と卒業後のキャリアラダーについて説明を行った。また、個別相談として、個々の学生の相談に応じた。学生が将来を見据えた進路選択について考えることができるように工夫した。
7. 就職・進学・資格取得に向けた学生支援	2011年4月～現在	看護職をめ目指す学生に対し、いつでも最新の情報が提供できるように、看護協会や都道府県等の情報を収集している。 看護職、看護研究職としてのキャリアアップとして進路相談を実施している。

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
<b>1 教育方法の実践例</b>		
8. 体験しながら理解する「できる」を感じる授業の実践	2011年4月～2015年3月	千里金蘭大学において、専任講師として2011年度から2012年度まで疫学保健統計学（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）を担当している。また同様に2013年度からは保健統計学（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）と疫学（専門科目、2年次配当、半期、選択2単位）を担当している。疫学・保健統計学は、学生にとって看護と直結する学問ではなく数学の延長であるという先入観を抱かれやすい。そこで、疫学が我々生活者にとっても身近なものであり、医学・看護の発展に大きな役割を果たしていることを国内外の事例から紹介し、学生の今後の学習意欲を高める取り組みを行った。また、苦手意識から生み出されるできない意識を払しょくするため、例えば有病率、罹患率の概念を理解した上で計算学習を実施した。計算学習には十分な授業時間を割り、自ら計算することで「分かる」「できる」を体験させ、学生の自己効力感を高め、また学生が「面白そう」「もっと知りたい」と思えるように、エピソードも交え講義を進めていく取り組みを行った。
9. 歴史を踏まえた発展的な価値の形成	2011年4月～2015年3月	千里金蘭大学の専任講師として、また近畿大学附属看護専門学校や大阪医療看護専門学校の非常勤講師、畿央大学健康科学部のゲストスピーカーとして担当した「国際看護学」「国際協力」などの国際看護・保健の授業において、国際協力の必要性とその歴史について、関連を持ちながら理解できるような工夫を行った。我が国が戦後多くの国から支援を得た経緯を伝え、復興、発展の道筋とそれを支援する諸外国の役割について、調べ学習を行った。調べ学習の発表の場を設けることで、支援の考え方や支援の在り方について学生同士で活発に意見交換ができた。その上で、看護の分野における国際協力について教授し、世界の現状と私たちができることについて考えられるように取り組んできた。
10. 学部生の研究指導	2011年4月～2015年3月	千里金蘭大学の専任講師として学部生の研究指導を行った。学生の興味関心を最大限に活かし、看護研究として成り立つテーマの選定とその具体的手法（質的・量的手法のどちらも）の指導に力を注いだ。指導にかかわった学位論文の例は以下である。 ・妊婦の禁煙継続に有効なアプローチの組み合わせ ・児童虐待に対する医療者の対応 ・介護予防教室前後での主観的健康感での変化 ・健康教室時間外での体操を継続して行える環境について ・比較的健康な高齢者の嚥下体操を通しての意識と予防行動の実態
11. コミュニティーエンパワーメントを目指した構造的な理解教育	2011年4月～2015年3月	千里金蘭大学の講師として担当の「健康相談論」（専門科目、3年後期配当、半期、必修2単位）や「地域看護学実習Ⅱ」（専門科目、3年後期から4年前期にかけて配当、1年、必修3単位）において、地域の問題を住民自らが解決しようと立ち向かっていくために、保健師としてのどのような支援が必要かを学生に考えさせるための実践的工夫を行った。学生は指導型の画一的な相談や健康教育によって問題解決を図ろうとする傾向がある。授業や実習ではこの短絡的思考を排除し構造的な問題解決思考に変えるような教育を行った。既存の統計データだけでなく、授業では住民の声を帰納的学習方法を用いて（例：ペーパーペイシエント）や実習では住民インタビューや関係機関への調査、健康相談の場を通して、意識的に住民の生の声を多数とらえさせた。そして、それらの声がどのように重なり合っているかを多角的に考えさせ、問題解決に向けた関係者分析を行い、問題の構造化を行った。これらのプロセスの中で保健師がどのような役割を担っているかを、現場の保健師からも語ってもらい、保健師が行う、コミュニティエンパワーメントという活動を体験的に理解できるように取り組んだ。
12. グローバルな視点で生活を捉える授業の実践	2008年4月～2009年3月	平成医療学園専門学校鍼灸科昼間部・夜間部の非常勤講師として担当の「公衆衛生学」（専門科目、1年次配当、全期、必修4単位）において、公衆衛生と生活との関連について、グローバルな視野で考えられるような工夫を行った。公衆衛生は住民の生活と密接に関連し、そのつながりは世帯や地域を超え、世界にまで発展することを、調べ学習、グループディスカッションおよびプレゼンテーションの一連の流れにより学習させた。日々の生活での疑問が日本やその他の地域ではどのようにしているかを、まずは日本の歴史や現状をインターネットを用いて調べる。次に、海外ではどのようなつながりがあるかを同様に調べる。調べた内容を各グループでまとめ発表を行う。さらに発表後、調べた結果だけでなく、そこから考えたことを一枚の紙にまとめ、それを元に討議を行った。本授業では、一見他人事として受け止められかねない事象を、ITを利用することで学生の興味関心を膨らませ、学生自身が積極的に調べ学習に参画でき、一人の職業人として地球問題を考えられるように取り組んで

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
<b>1 教育方法の実践例</b>		
13. 現象から政策へ、発展的思考を促す教育の実践	2008年4月～2011年3月	きた。 豊中看護専門学校の非常勤講師として担当の「基礎看護学・看護研究」、「看護研究」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）において、原因と結果の関係と結果を変えるための考え方について教授方法を工夫した。ある物語（アフリカに住む6歳の少年が破傷風でなくなる物語）を読み、引き起こされた一つの現象（死亡という結果）が生活とどのような因果関係を持つのかを考えさせた。第一段階として、なぜ少年は死亡したのか、その直接的・間接的原因をすべて列記させ、それらの原因がどのように繋がっているのか、関連図を描くことで可視化した。次に、なぜ死はこの少年に訪れたのか、第2の少年を出さないためには、具体的に何をどうすればよいのかをグループディスカッションを通して考える。この思考プロセスを通して、学生の研究に対する興味と関心をひき寄せると同時に、論理的思考のあり方を理解できるように取り組んできた。
14. 学部生、博士前期課程学生の研究指導	2008年4月～2011年3月	所属する研究室の教授の助言を受け、大阪大学医学部保健学科・医学系研究科の学生の研究指導に携わった。論文指導では、疫学的手法を用いた研究の実施が多かった。なお、実際に指導にかかわった学位論文は以下の5編（前2編は学士課程、後3編は修士課程）である。 ・アイマークレコーダを用いた案内表示の視認と経路探索行動の特性～空間のわかりやすさとは何か～ ・急性期循環器専門病院におけるナースステーションの音環境に関する研究 ・小児がん治療の集中化指標に関する検討(The analysis of centralization of childhood cancer treatment) ・放射線治療資源と乳がん患者予後に関する研究(The relation analysis on the treatment resources in radiotherapy and the prognosis of breast cancer patients: the database linkage analysis) ・地域がん登録に基づくがん患者の受療行動に関する研究およびがん登録事業のビジネスモデル分析(The study for pattern of the access to care services of cancer patients based on population-based cancer registry and the business analysis of cancer registry)
15. 学部生の研究指導	2007年4月～2008年3月	兵庫県立大学看護学部の助教として学生の実践研究指導を行った。実際に指導にかかわった学位論文は以下の2編である。 ・地域における健康危機管理体制づくりと保健師の役割 ・中堅保健師を対象とした実践型研修受講者の実践活動の分析を通して
16. 教科書と実践を結び付ける教育	2005年4月～2008年3月	兵庫県立大学看護学部の助教として担当の「地域看護学演習・実習」（専門科目、3年次配当、半期、必修2単位）において、地域に住む住民の現状から住民の潜在的・顕在的課題を明らかにし、保健師として必要な実践力が形成されるよう、実際の地域住民の生活の場を想定した実践教育方法の工夫を行った。学生自身が家族を地域看護の対象として、日々の生活やその人の価値観、健康観についてインタビューし、その結果をグループごとに視覚媒体としてまとめる方法を採用した。教員は教授、准教授、助教もしくは助手3名の集団教育体制をとり、それによりきめ細やかな教育が可能となった。教科書での学びを学生の身近な人々の生活から描き出すことで、より具体性を持った課題を検討することが出来、後につながる実習の完成度が飛躍的に高まった。
17. 住民参加を基本にした教育	2005年4月～2008年3月	兵庫県立大学看護学部の助教として担当の「総合実習」（専門科目、4年次配当、半期、必修2単位）において、家庭訪問を通じ地域の健康問題を考え、住民自らが解決策を見つけ取り組んでけるようになるための、実践的方法の工夫を行った。本実習では健康教育の場を学生と住民の双方向による語りの場（集いの場）と位置づけ設定した。その具体的な狙いは、学生が陥りやすい「知識を伝えれば教育になる」というある種の錯覚を学生自身に気付かせることである。さらに、学生が健康課題を明らかにできたとしても、一方通行のおしつけの健康教育では何の解決策にもつながらないことを体験、理解できるようにすることである。マスメディアの普及により多くの健康情報を住民が持ち得ている中で、住民の健康行動の変容が最も重要であり、それを実現するためには「住民自らが自身の実態に客観的に気づき」「どうすればよいか」を共に考える健康教育の実践が必要である。看護師が行う健康教育ではなく、保健師が行う健康教育とは何かを考えさせる取り組みを行ってきた。
18. 双方向の授業の実践	2005年4月～2008年3月	兵庫県立大学看護学部の助教として担当の「在宅ケア演習」（専門科目、3年次配当、半期、必修2単位）において、教員と学生間の双方向の授業だけでなく、当事者との関わりを持つことで患者・家族の理解を促す演習方法を工夫した。当事者とのかわりに関しては、ビデオ学習を行った。ビデオの選定は教材用のビデオではなく、

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 教育方法の実践例</b>		
19. 体験を深めるための教育	2000年4月～2008年3月	<p>在宅介護当事者が出演しているドキュメンタリーを用いた。次に、ビデオで見た当事者に在宅介護経験の講演を依頼し、公演後に当事者との意見交換会を実施し、一連の流れを意識した演習を心がけた。最終段階として、患者家族の理解やサービスの在り方について、学生間、学生教員間でディスカッションした。病院以外の地域における高度医療を必要とする人々の暮らしと支援方法を、患者の立場や支援者の立場の両方から考えられる力を身につけられるように取り組んできた。</p> <p>兵庫県立大学看護学部の助教として担当の「基礎看護学実習」（専門科目、1年次配当、半期、必修1単位）において、看護の心を学生自身が体感でき、今後の看護学教育、看護職への就職の普遍的な動機付けとなるように教育方法を工夫した。初めての看護実習では、病棟実習を行う前に闘病記などを読み、実習グループで病と共に生きることについて議論することを取り入れた。実践に即した技術習得を目指すだけでなく、人間として生きること、死ぬこと、病とともに生きることを考える時間を積極的にとった。学生の考えを公表し書き出すことで、グループメンバーの様々な認識が浮き彫りになった。答えを見つけ出すのではなく、答えを模索し揺れ動く気持ちに看護者として近づくことの難しさと、他者を理解し受け入れる事の重要性を感じ、また考える実習方法に取り組んできた。</p>
<b>2 作成した教科書、教材</b>		
1. 『ワークブック国際保健・看護基礎論』テキスト作成	2016年3月刊行	<p>本テキストは人間の安全保障を切り口に国際保健・看護を見るという点で、今までの看護系のテキストにはない、地球規模の持続可能な発展のために何が必要かを学ぶことができる内容となっている。また国際保健・看護体験のない教員が「看護の統合」科目として教授することができるように、学生とのディスカッション時に何をディスカッションすれば良いか、またディスカッションで得られるであろう考えの例も示し、誰もが国際保健・看護を考え話せるように工夫した。</p>
2. 統計学における検定方法とその特徴一覧の早見表作成	2015年4月～	<p>武庫川女子大学看護学研究科の専任教員として「保健統計学」（専門科目、1年次配当、半期、必修2単位）において、講義用教材として、統計で用いる各種検定方法の特徴ごとの早見表を作成した。実践に応用できる事を重視しつつも、基本的な考え方や特徴を踏まえられるように、これらを統合して1枚にまとめ、携帯できるように工夫した。</p>
3. 『国際看護・国際保健』テキスト作成	2012年1月刊行	<p>国際看護や国際保健を学ぼうとする学生を対象に作成したテキストであり、国際保健の教科書としても利用されている。</p> <p>実際のアフリカでの体験を通し、プライマリ・ヘルスケアの展開を解説している。現象の全体を捉えるとはどういう事かを事例を用いながら説明し、ニード指向性のある保健活動、保健活動への住民参加等のプライマリ・ヘルスケアの原則についても触れ、概念と実践を結び付けて捉えることができるよう工夫した。</p>
4. 高齢者対策体系図の作成	2011年4月～	<p>千里金蘭大学の講師として「地域看護活動論演習Ⅱ」（専門科目、3年次配当、半期、必修2単位）において、講義用教材として、高齢者施策、介護保険制度などの政策や活動実践をまとめた資料を作成した。頻りに制度が改正される高齢者対策を体系的に学べるように、歴史とその時の政治、経済状況などを盛り込んで資料を作成し講義を行った。今後の高齢化率の変化を予測し、未来のビジョンを描けるように、社会の動きと連動した課題について考えさせ、それを資料に記入できるように工夫した。</p>
5. 災害時の看護ボランティア活動の知恵袋（日本語版と英語版の作成）	2005年4月～	<p>21世紀COEプログラムユビキタス社会における災害看護拠点の形成の活動の一つとして、災害直後から中期における避難時期の支援活動に必要なものを知恵袋として冊子にまとめた。被災地へのアプローチ方法から始まり、災害の種類に応じた服装や持ち物、情報集ルート、ボランティア保険についても記した。また被災地状況のアセスメントの視点をコミュニティアスパートナーモデルを軸にして組み立て、応援保健師がすぐに現場で戦力となるように細かに提示した。また被災地での自分の行動や自分自身のケアをどうするかについても触れ、応援保健師の自己完結型の姿を分かりやすく端的に表現する工夫を行った。また、日本語版だけでなく英語版も作成し、広く利用してもらえるようにした。</p>
6. 健康危機管理に関わる保健師のための演習プログラムの開発	2005年4月～	<p>災害発生事例を題材として、健康危機管理に対する保健師としての情報収集・状況判断・活動方法・連携等をシミュレーション（疑似体験）する事により、健康危機に関する判断や意思決定のあり方を学べる教材を作成した。現役の保健師が自らの健康危機管理に対する認識を振り返られるように、事例の選定には今までの事例での課題を応用しながら作成した。</p>

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>2 作成した教科書、教材</b>		
7. サービスや法律の変遷と、これからのビジョンを織り込んだ教材の開発	2005年4月～	兵庫県立大学看護学部の助教として「地域看護学活動論」（専門科目、3年次配当、半期、必修2単位）において、講義用教材として、母子保健、精神保健などの政策や活動実践をまとめた資料を作成した。従来であれば講義は講師以上の職位の教員が行っていたが、保健師としての実践が8年あること、現実的で実践的な資料を用いて講義ができると判断され、作成した資料を用いて講義も行った。資料では、学生が理解しにくい保健行政の仕組みや保健サービスについて、実践した家庭訪問事例や相談事例を取り上げ解説した。また行政の法律や規則は頻繁に変わるため、その変遷を図示し、同じサービス利用者であってもその時代によりサービス内容に違いがあることや、いわゆる「法（制度）の隙間」にある人々への支援を考える手助けとして活用できた。学生からは、制度の経過が事例を通して理解できると、またその資料に今後制度が変わっても書き足せるスペースがあることが良いとの声を聞いた。実践経験の少ない学生の学習を支援する教材になり、退職するまでの3年間は事例を継ぎ足し変更し、退職後もその資料は使われている。
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
1. 医療機関での看護研究指導	2008年4月～2011年3月	大阪大学医学系研究科の教授と共に、独立行政法人国立病院機構奈良医療センターの看護研究指導を行った。研究指導では主として量的分析の手法と結果の分析を担当した。研究成果は病院全体で取り組まれている看護研究報告会で報告された。そこに助言者として招かれ、病棟の垣根を超えた積極的な意見交換が出来るように支援した。実際に指導にかかわった看護研究は以下の10編である。その一例として、「病院外来配置換え前後の動線分析報告：患者さんの動きを中心に」、「転倒転落インシデントレポートからの分析とスタッフへのアンケート調査から見えてきたもの」、「四肢・体幹に変形・拘縮を認める重心児に適した腹臥位クッション作成の取り組み」、「重症心身障がい者の体重に関する研究一経年的変化の調査から見えてきたこと一」、「転倒・転落防止のための畳ベッドの活用一畳使用スクリーニングシートの作成と実施一」、「転倒・転落インシデントレポート結果、分析とスタッフのアンケート調査から見えてきたもの一アンケート調査を実施して一」、「外来待合の安全性を考える～補助具を使用する患者の増加に伴う待合の椅子の位置変更を試みて～」。
2. 健康危機管理に関わる保健師のためのシュミレーション演習の実施	2005年4月～2007年3月	独自に開発したシュミレーションプログラムを、兵庫県下の保健所と市町村の保健師を対象に危機管理演習として実施した。県下直下型大規模地震の事例と管内を含む広範囲な地域に被害が及んだ100年に一度の田風災害の事例を用いた。保健師の中には阪神淡路大震災での活動経験者もあり、グループワークで経験を交えながら事例に取り組む姿がみられ、経験者から未経験者へと被災の現状や支援の実際について伝承されていた。演習をとって、平時からの備えの取り組みについても具体的に検討できた。
<b>4 その他</b>		
1. 大学教育に関する団体等の活動の実施	2016年6月～現在	一般社団法人全国保健師教育機関協議会の教育体制委員会委員として、保健師教育の質の向上を目指し、保健師教育の充実を図る取り組みを行っている。具体的には、保健師教育課程の質を保証する評価基準検証すること、保健師教育課程の教育体制等に関する調査を実施し保健師教育体制の実態把握と課題の明確化すること、保健師教育課程を看護師教育課程に上乘せする活動を推進することを行っている。現在、保健師養成機関は養成所、短大専攻科、学士課程（全員必修）、学士課程（選択制）、大学院修士課程と多様化しているが、保健師教育の質が保障できるように活動を継続して展開していく。
2. 地理情報システムの活用トレーニング基礎編修了	2016年2月26日	財団法人地理情報システム学会GIS資格認定協会主催の教育認定を受けたArc GIS for Desktop II 基礎編（コース番号：ET02、教育時間数：19.5時間）の受講を修了した。武庫川女子大学大学院看護学研究科の公衆衛生看護学演習IIではGISを用いた地域診断を実践しており、学生への機器の操作指導はもとより、データを可視化し、分かりやすく広く住民に伝えるために必要な情報を教授するのに役立っている。
3. 地理情報システムの活用トレーニング入門編修了	2016年1月15日	財団法人地理情報システム学会GIS資格認定協会主催の教育認定を受けたArc GIS for Desktop I 入門編（コース番号：ET01、教育時間数：13時間）の受講を修了した。武庫川女子大学大学院看護学研究科の公衆衛生看護学演習IIではGISを用いた地域診断を実践しており、学生への機器の操作指導はもとより、データを可視化し、分かりやすく広く住民に伝えるために必要な情報を教授するのに役立っている。
4. 手話同好会の活動支援	2015年4月～2017年3月	武庫川女子大学の公認同好会である手話同好会において、手話の技術指導と手話を楽しく学ぶための情報提供を

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>4 その他</b>		
5. 入学試験問題の作成	2011年4月～	行っている。また、同好会として大学の所在地である西宮市の聴覚障害者団体と交流が持てるよう、調整を行った。さらに、他大学の手話サークルやNPO等の手話関連団体とも連絡を取り、学生の学びにつながるよう支援している。 学長より入学試験問題の出題者として任命され、入学試験問題を作成した。問題作成にあたり、受験者の基礎的かつ基本的な学力が反映されるように配慮した。また、受験者の思考過程に沿った設問及び設問形式となるように工夫し、各設問の難易度がバランスの取れた問題となるように考慮した。さらに、論理的な思考力と感性的な鑑賞力及び表現能力も判断できるように配慮して問題作成に当たった。
6. 国際看護サークルの顧問	2006年4月～2008年3月	兵庫県立大学看護学部の学生の申し出により、国際看護サークルの立ち上げようと共に、サークル活動の支援を行った。また、明石市の国際交流センター等と連携をとり、学外においても外国人、在日外国人の方々への看護支援を行えるよう協働して取り組んだ。その結果、学生は対象者への文化理解を深めるとともに、文化とケアを連動させて考え活動できるようになった。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 資格、免許</b>		
1. 思春期保健相談士免許	1999年5月1日～現在	現在は教育活動に従事しているため直接的には必要でない。しかし、保健師教育を行ううえで必要となる実践活動の展開の際に有用であった。免許を活用して実践を積み重ねたことで、実際の活動展開を教育活動の中で指導するのに役立っている。
2. 受胎調節実地指導員免許	1997年10月21日～現在	現在は教育活動に従事しているため直接的には必要でない。しかし、母子保健というテーマを幅広い視野で捉え、学生教育や学生の生活指導の実施に役立っている。
3. 保健婦免許	1995年5月23日～現在	看護教育の中でも特に地域看護領域の教育・研究には必須の免許である。保健師としての実践、保健師教育に従事することに直接役立っている。
4. 第一種衛生管理免許	1995年5月23日～現在	地域看護領域の中には産業保健の分野があり、学生に産業保健を教授するのに役立っている。
5. 看護婦免許	1994年5月19日～現在	看護教育を行うために必須の免許である。地域看護を専門としているが、看護全体を把握していることが必要である。学生教育に直接役立っている。
<b>2 特許等</b>		

3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 堺市健康福祉局保健福祉施設等施設整備審査会委員	2017年5月～現在	大阪府堺市より依頼され、有識者の代表として携わっている。公平公正な視点で堺市市民の利益と発展、安全に寄与できるよう、公平かつ現状に即した審査が出来るよう社会に貢献していく。
2. 自分自身の考えを言語化できるような国際理解教育の実践⑮	2017年2月13日	文部科学省が指定するスーパーサイエンスハイスクール（大阪市立東高等学校）において、国際理解教育ならびにキャリア教育の一環として、「総合的な学習の時間、国際・看護関係講座」の講師として普通科、英語科2年生に対し講義を行った。外国の言語や文化に関する自身の体験を映像と共に紹介することで、学生は、国際協力とは何か、ツールとしての言語、看護の普遍性について考えていた。学生からは、今後の進路選択において視野が広がったという感想が得られた。
3. 高等学校の学生に対する模擬授業の実施	2017年10月	多くの学生に看護学への興味を持ってもらうため「健康問題の視点～少年はなぜ死んだのか～」というテーマで模擬授業を行った。人の死を通して、社会構造と健康を体系的に理解できるようにした。
4. 第48回日本看護学会慢性期看護学術集会	2017年1月	日本看護学会慢性期看護学術集会抄録選考委員会委員を担当した。
5. 一般社団法人全国保健師教育機関協議会教育体制委員会委員を担当	2016年6月～現在	一般社団法人全国保健師教育機関協議会理事会より委嘱された。本協議会は、優秀な保健師を育成することを目指し全国の保健師教育機関の発展と、保健師教育の充実のための全国規模での活動を行っている。教育体制委員会では、保健師教育課程選択制の効果と課題を明確にし、看護師教育課程に上乘せする活動を推進するとともに保健師教育課程の質を保證する評価基準について検討し、会員校の教育体制の整備を後押しするために活動を行っている。今後もこれらの活動を推進し社会に貢献していく。
6. 2017年度兵庫県看護協会看護実践研究会	2016年11月	兵庫県看護協会看護実践研究会を開催し運営に携わる一方、特別講演の座長を担当した。
7. 高石市指定管理者候補者選定委員を担当	2016年11月～2017年3月	大阪府高石市より依頼され、有識者の代表として携わっ

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
8. 自分自身の考えを言語化できるような国際理解教育の実践⑭	2016年1月13日と2017年1月19日	<p>ている。高石市は平成18年4月から公の施設の指定管理者制度を導入している。今後も公平公正な視点で高石市市民の利益と発展、安全に寄与できるよう、公平かつ現状に即した選定審査が出来るようにした。</p> <p>奈良県立病院機構看護専門学校の学生に対し、国際理解教育としてと、発展途上国の医療の現状についての講演を行った。国際的な医療看護活動の仕組みや実際を伝え、それを基にグローバルな視点で健康問題を捉えられるように、事例を用いてディスカッションを行った。目の前の患者はただ一人の患者ではなく、その患者から人がつながり、ひいては世界へとつながっていく事を学生は学んでいた。</p>
9. 第15回日本アディクション看護学会学術集会	2016年1月	日本アディクション看護学会学術集会にて実行協力員として学会運営に携わった。
10. 兵庫県看護協会看護実践研究会企画委員を担当	2015年6月～現在	兵庫県看護協会より依頼され、兵庫県看護協会の教育機関代表として携わっている。今後も兵庫県下の看護職が研究的な取り組みを推進できるように、また成果のたつた看護実践を県内の看護職に発信し、看護の質の向上に寄与できるように社会に貢献していく。
11. 自分自身の考えを言語化できるような国際理解教育の実践⑫	2015年5月9日	奈良県立病院機構看護専門学校の学生に対し、国際理解教育とキャリアプランの検討のために、発展途上国の医療の現状についての講演を行った。看護師が出来る国際協力とは何か、また国試協力のために何を学び、どのように経験を積みは良いかについてディスカッションを行った。キャリアプランに関しては、将来像を描く事の重要性についてグループワークを行い、それぞれが看護職として生きる意味と価値について考えた。一人ひとりが自身の思いを発言できるように、小グループ分けにし、考える時間を十分にとり工夫を行った。
12. 介護認定審査会委員を担当	2015年4月～現在	大阪府茨木市の介護認定審査会委員を茨木市より依頼され、保健分野の代表として審査に携わっている。高齢者の増加に伴い、介護支援の需要は増加している。今後も介護認定審査において公平かつ現状に即した審査が出来るよう社会に貢献していく。
13. 自分自身の考えを言語化できるような国際理解教育の実践⑩	2015年1月13日	奈良県立病院機構看護専門学校の学生に対し、国際理解教育としてと、発展途上国の医療の現状についての講演を行った。国際的な医療看護活動の仕組みや実際を伝え、それを基にグローバルな視点で健康問題を捉えられるように、事例を用いてディスカッションを行った。
14. 第2回看護理工学会学術集会	2014年10月	看護理工学会学術集会にて実行協力員として学会運営に携わった。
15. 日本国際保健医療学会代議委員	2014年10月～現在	日本国際保健医療学会の選挙にて選出され代議委員として学会に携わっている。国際保健に関わる教育や研究の推進、研究の促進、研究者や将来国際保健の活動の場を目指す学生との交流、学生による国際保健フォーラムや講演会の支援等を積極的に起こっている。
16. JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテストにおいて大阪府の一次審査委員	2014年10月～現在	次の世代を担う中学生・高校生を対象に、開発途上国の現状や開発途上国と日本との関係について理解を深め、国際社会の中で日本、そして自分たち一人ひとりがどのように行動すべきかを考えることを目的としている。審査では、公平・公正である事はもちろん、本目的に対して自身の考えを言語化し表現する力を持っていてことを厳密に審査した。
17. 市町村看護職員協議会研修会での講師	2012年5月9日	奈良県市町村看護職員協議会から依頼を受け、「保健師・看護師が元気になるために～セネガル共和国の公衆衛生看護から日本の保健活動を考える～」と題して講演を行った。講演では、現在の保健師養成の実態と課題、新卒保健師の業務上での悩みについて概説した。また、多々ある業務を整理するために疫学的手法を用いることの重要性和その実際についても紹介した。今必要な保健師活動とは何かについて、セネガルでの公衆衛生看護活動の経験から述べた。
18. 自分自身の考えを言語化できるような国際理解教育の実践⑩	2012年11月28日	兵庫県立長田商業高等学校の生徒に対し、国際理解教育として、発展途上国の医療の現状についての講演を行った。パワーポイントを使用し、途上国で暮らす人々の生活の写真の提示し、彼らの社会的・文化的な価値観や信念について説明した。平和や平等という言葉を生徒なりに考え、自ら問題に取り組んでいけるよう工夫した。
19. 自分自身の考えを言語化できるような国際理解教育の実践⑨	2011年2月15日	大阪市立東高等学校の生徒に対し、国際理解教育として、発展途上国の医療の現状についての講演を行った。パワーポイントを使用し、途上国で暮らす人々の生活の写真の提示し、彼らの社会的・文化的な価値観や信念について説明した。平和や平等という言葉を生徒なりに考え、自ら問題に取り組んでいけるよう工夫した。
20. 高等学校での模擬授業	2011年10月11日	兵庫県立伊丹西高等学校にて、「地域看護と相互扶助について ～西アフリカ・セネガルの保健医療から～」という講義テーマで模擬授業を実施した。パワーポイント

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
21. 自分自身の考えを言語化できるような国際理解教育の実践⑧	2011年1月21日	<p>を使用し、医療・看護が相互扶助の精神のもと行われ、それぞれ国民が果たす役割とは何かについて解説した。将来、看護や保育、福祉に携わろうと考えている学生が対象であったことから、学生が日常生活の中で体験した助け合いについてディスカッションし、助け合いの仕組みとしての医療や保健の姿について、また助け合いの発展系としての政策について理解できるように工夫し、授業を進めた。</p> <p>大阪市立友渕中学校の生徒に対し、国際理解教育として、発展途上国の医療の現状についての講演を行った。パワーポイントを使用し、途上国で暮らす人々の生活の写真を提示し、彼らの社会的・文化的な価値観や信念について説明した。平和や平等という言葉を学生なりに考え、自ら問題に取り組んでいけるよう工夫した。</p>
22. 自分自身の考えを言語化できるような国際理解教育の実践⑬	2011年1月21日	<p>大阪市立友渕中学校の生徒に対し、国際理解教育として、発展途上国の医療の現状についての講演を行った。パワーポイントを使用し、途上国で暮らす人々の生活の写真を提示し、彼らの社会的・文化的な価値観や信念について説明した。平和や平等という言葉を学生なりに考え、自ら問題に取り組んでいけるよう工夫した。</p>
23. 自分自身の考えを言語化できるような国際理解教育の実践④	2010年6月5日	<p>私立藍野学院短期大学附属藍野高等学校の生徒に対し、国際理解教育として、発展途上国の医療の現状についての講演を行った。パワーポイントを使用し、途上国で暮らす人々の生活の写真を提示し、彼らの社会的・文化的な価値観や信念について説明した。平和や平等という言葉を学生なりに考え、自ら問題に取り組んでいけるよう工夫した。</p>
24. webページコラムの執筆	2010年10月29日～下記の期間 2010年11月26日	<p>株式会社ピラールプレスより「日本の医療者に向けて世界で活躍する医療者や各国の医療情報、見知らぬ国の医療活動を伝える」ことをコンセプトに執筆依頼を受け、5回にわたり連載した。第1回は「セネガルの保健医療 他国への興味関心の『先の先』にあるもの」、第2回は「セネガルの保健医療 西洋医療あれこれ、患者と医療者の二重奏『見た目疾患』」、第3回は「セネガルの保健医療 伝統医療あれこれ、『西洋医療の限界』か『伝統医療の可能性』か」、第4回は「表裏一体、どの立場で『医療を語る』か、どの立場で『医療を受け止める』か」、最終回は「『エビデンスベース』を捉えなおせるか」と題し、読者が保健医療者を目指す高校生・大学生であることを考慮し、セネガルの医療事情と地域住民の暮らしぶりを事例を用いながら解説した。</p>
25. 自分自身の考えを言語化できるような国際理解教育の実践⑦	2010年1月19日	<p>高槻市立男女共同参画センターが企画する国際理解教育として、発展途上国の医療の現状についての講演を行った。パワーポイントを使用し、途上国で暮らす人々の生活の写真を提示し、彼らの社会的・文化的な価値観や信念について説明した。平和や平等という言葉を学生なりに考え、自ら問題に取り組んでいけるよう工夫した。</p>
26. 青年海外協力隊応募促進支援活動	2009年9月～2009年10月	<p>青年海外協力隊事業についての広報・啓発活動や応募促進事業を全国の草の根レベルで展開することにより、青年海外協力隊の応募者の増大を図ることを目的とし、全国ポスター掲示キャンペーンを行った。多くの若者が、日本を飛び出し、異文化の中で自助・共助・公助の実際を体験すると共に、国際平和や国際協力のあり方を考えられる機会の提供を行った。</p>
27. 自分自身の考えを言語化できるような国際理解教育の実践②	2009年8月28日	<p>財団法人とよなか男女共同参画推進財団が企画する国際理解教育として、発展途上国の医療の現状についての講演を行った。テーマは「途上国における母子保健やジェンダー事情について」である。パワーポイントを使用し、途上国で暮らす人々の生活の写真を提示し、彼らの社会的・文化的な価値観や信念について説明した。平和や平等という言葉を学生なりに考え、自ら問題に取り組んでいけるよう工夫した。</p>
28. 保健医療システムの構築を目指したセネガル共和国での活動	2009年2月～2009年6月	<p>西アフリカにあるセネガル共和国保健予防省保健局民間医療・旅行医学・伝統医療課の研究生として、セネガルの保健医療行政を学ぶとともに、セネガルにおける西洋医療と伝統医療を一つとシステムとして構築するための調査や保健予防省職員とのディスカッションを行った。疫学的手法を用い現状を評価し、新たなシステムの構築に必要なソフト面、ハード面をどのように考えるかについて議論を重ねた。日本の保健・医療・福祉システムについて紹介し、持続可能、実現可能な体制作りについて助言を行なった。</p>
29. 自分自身の考えを言語化できるような国際理解教育の実践⑥	2009年11月26日	<p>箕面市立萱野東小学校の生徒に対し、国際理解教育として、発展途上国の医療の現状についての講演を行った。パワーポイントを使用し、途上国で暮らす人々の生活の写真を提示し、同じ年代の子どもたちの一日について紹介した。同じ年齢でありながら違うところと同じところを発表しあい、世界の子どもたちが元気で安心して暮らしていけるために必要なものについて考えた。</p>



職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
30. 自分自身の考えを言語化できるような国際理解教育の実践⑤	2009年11月11日	滋賀県国際交流推進協議会が企画する国際理解教育として、発展途上国の医療の現状についての講演を行った。パワーポイントを使用し、途上国で暮らす人々の生活の写真を提示し、彼らの社会的・文化的な価値観や信念について説明した。平和や平等という言葉が学生なりに考え、自ら問題に取り組んでいけるよう工夫した。
31. 自分自身の考えを言語化できるような国際理解教育の実践③	2009年10月29日	神戸学院大学の生徒に対し、国際理解教育として、発展途上国の医療の現状についての講演を行った。テーマは「途上国での保健医療分野の現状」である。パワーポイントを使用し、途上国で暮らす人々の生活の写真を提示し、彼らの社会的・文化的な価値観や信念について説明した。平和や平等という言葉が学生なりに考え、自ら問題に取り組んでいけるよう工夫した。
32. 「アフリカ仏語圏地域保健能力向上」コースの研修生に対する講演	2008年6月12日	財団法人国際看護交流協会の依頼を受け、来日したアフリカフランス語圏の看護師、医師、福祉職員らに対し、日本の公衆衛生の実際とその活動方法について教授した。文化的背景の違いがあるが、日本の戦後の復興とそれを支えた地域住民の生活について概説し、日本の公衆衛生が直面した課題とその対処法について具体的に事例を用いて解説した。
33. 第1回世界災害看護学会	2007年8月	世界災害看護学会の開催にあたり、演題・抄録管理把握を担当した。
34. 自分自身の考えを言語化できるような国際理解教育の実践①	2006年11月18日	兵庫県立小野高等学校国際経済科の生徒に対し、国際理解教育として、発展途上国の医療の現状についての講演を行った。パワーポイントを使用し、途上国で暮らす人々の生活の写真を提示し、彼らの社会的・文化的な価値観や信念について説明した。平和や平等という言葉が学生なりに考え、自ら問題に取り組んでいけるよう工夫した。
35. 第7回日本災害看護学会	2005年7月	日本災害看護学会の開催にあたり、事務局の一員として参加し、スムーズな運営に尽力した。
36. 被災地における地域看護支援ネットワークのあり方の検討	2005年4月2008年3月	21世紀COEプログラムユビキタス社会における災害看護拠点の形成の活動の一つとして、2007年8月10日から12日まで新潟中越沖地震の被災地に兵庫県からの連絡を受け、第5陣看護専門家支援ネットワーク班として被災地に出向いた。被災地では後方支援として、発災27日目に開催される柏崎市派遣保健師報告会の準備を行った。災害派遣の保健師の活動を整理し、災害フェーズごとに的確な支援が出来るように情報を提供した。
37. 国際地域看護研究会 事務局長	2005年4月2008年3月	所属している国際地域看護研究会の事務局長として任命され、3年間研究会の代表として内外での研究活動の発信と知見の集積に力を注いだ。また、インドネシア人の研修の実践・研究活動を本委員会としても支援し、研究会会員とインドネシア人、ひいてはインドネシア政府との関係強化に尽力した。
38. 第22回日本国際保健医療学会西日本地方会	2004年3月	日本国際保健医療学会西日本地方会の開催にあたり、事務局の一員として参加し、スムーズな運営に尽力した。
39. 台風23号による兵庫県豊岡市の円山川決壊後の復旧ボランティア	2004年10月	豊岡市の一級河川である円山川や出石川が決壊し、長らく雨が降り続いたために堤防が破壊し、多くの家が浸水した。ボランティアセンターに登録し、直ちに被災地に入り、ヘドロかきや家具の運び出し、農耕地に流れ込んだ流木等の撤去活動を行った。
40. 「発展途上国の看護職者に対するプライマリヘルスケア研修」受講のインドネシア人研修生に対する学習支援活動	2003年4月～2005年3月	JICAの事業である「発展途上国の看護職者に対するプライマリヘルスケア研修」のために来日したインドネシア研修生に対し研修のファシリテーターを務めた。研修では、インドネシアの保健データ等を基にアクションプランをPCM (Project Cycle Management) 手法を用いて検討した。また、作成したアクションプランが、帰国後現地で実践できるように、互いにディスカッションを繰り返して、具体的な計画を立案となるよう支援した。
41. NPO青少年育成事業「青少年ネットワークYAMATO」理事	2003年4月～2005年3月	青少年の健全育成に向け、小・中学生が地区内の活動に積極的に取り組める居場所づくりを行い、地域との関わり合い、コミュニケーションを学ぶ機会を設けた。また、青少年が抱える様々な悩みに対し、相談が出来るように支援した。
42. 国際看護教育に関する学会等での活動	2003年4月～現在	2003年以来、所属している国際地域看護研究会として日本国際保健医療学会で毎年自由集会を開催している。自由集会のテーマは、本大会の趣旨に合わせ柔軟に対応してきた。国際看護という新しい学問領域を海外の先駆的取り組みから、日本におけるその学問をいかに捉えるかについて、参加したフロアの方とディスカッションしてきた。また学会だけでなく、年6回の研究会を通じて看護界のみならず多くの人々に情報の発信を行った。
43. 小学校・中学校との連携活動	2000年8月～2003年3月	天理市役所健康福祉部の保健師として、受胎調節実地指導員と思春期保健相談士の認定を受け、母子保健対策の中でも特に思春期保健に焦点化し、次世代育成のための取り組みを行った。助産師と学校の養護教諭と連携し、

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
44. 看護専門学校から受け入れた実習生に対する指導	2000年8月～2003年3月	思春期の課題である性感染症や妊娠、喫煙などについて対象者の理解レベルに合わせた講演を行った。その際、家庭に持ち帰って話ができるように資料を作製し、また話を身近なものとして受け止められるよう媒体を用いて講演を進める工夫を行った。 天理市役所健康福祉部の保健師として実習指導担当者となり看護学生に対し、地域看護の実践内容について講義を行った。その際、病院以外の地域で暮らす人々の健康問題がイメージできるように工夫を行った。健康問題が常に「疾患名」と結びつくのではなく、生活の中での些細な健康に関する疑問や不安にも焦点を当てて地域看護活動が行われていることを伝えるため、乳幼児健康診査を取り上げ具体的な事象と共に解説する取り組みを行ってきた。また、実際の乳幼児健康診査の場を実習生も参加させ、健康診査に訪れた母親とコミュニケーションをとることで、生の声に触れる機会を多く持つように配慮した。看護学生の学びには、病院で働く看護師であっても、患者の普段の生活スタイルや地域でのその人らしい生き方を考慮したかかわりを持つことが重要だという感想があった。
45. 保健師教育機関から受け入れた実習生に対する指導	2000年8月～2003年3月	天理市役所健康福祉部の保健師の実習指導者として、地区踏査、基本統計から地域全体の把握、家庭訪問指導、各種健康診査及び地区活動としての健康教育の指導を行った。教科書での学びが、地域で生活する住民の実態とどのように関連しているのかを学ぶための工夫を行った。教科書では「健康問題を抽出する」と書かれているが、学生はどのように健康問題を抽出すればよいのかが分からず、形式的な質問で問題を無理に見つけ問題化してしまう傾向があることに気づいた。そのため、継続的な家庭訪問や自転車に乗ってのローカルな地区踏査の手法を用いて、学生が地域住民と直接触れ合う機会を多く作った。また保健師が行っている疫学的調査についても説明し、既存データから地域をとらえることの重要性を伝えた。そのことで学生は、実態から潜在的・顕在的問題を対象者の生活の中から見つけ出し、決して重大で大きな問題だけが健康問題ではなく、その人がその人らしく生きていくために困難を感じている問題こそが、対象にあった健康問題の抽出であることを体験できるように取り組んだ。
46. 青年海外協力隊（保健師）としてセネガル共和国に赴任	1998年7月～2000年7月	天理市役所より青年海外協力隊保健師隊員として、セネガル共和国ファティック州トッパクータ郡事務所に派遣され、地域保健活動に従事した。具体的には、担当地域を受け持ち、その村での1.安全な水の確保、2.乳幼児の栄養改善、3.マラリア予防、4.HIV/AIDSへの予防啓発、5.診療所の開設活動に取り組んだ。乳幼児の栄養改善では、日本での保健師としての知識を用い、また現地の文化や医療を考慮したうえで、保健指導を行い、乳幼児の健康増進に取り組んだ。診療所の開設では、自治会、村長、町の看護師らと協議を重ね、どのような診療所が住民にとって必要かを検討した。その際、コーディネーターとして専門職と住民の間を調整した。さらに、住民と共に寝食を共にし、地域住民の一人として現地に溶け込み、日ごろの保健活動だけでなく、人としての価値観、世界観を探求した。
47. 小学校・中学校との連携活動	1996年4月～1998年3月	天理市役所健康福祉部の保健師として、受胎調節実地指導員と思春期保健相談士の認定を受け、母子保健対策の中でも特に思春期保健に焦点化し、次世代育成のための取り組みを行った。助産師と学校の養護教諭と連携し、思春期の課題である性感染症や妊娠、喫煙などについて対象者の理解レベルに合わせた講演を行った。その際、家庭に持ち帰って話ができるように資料を作製し、また話を身近なものとして受け止められるよう媒体を用いて講演を進める工夫を行った。
<b>4 その他</b>		
1. 大学での委員会等の活動：大型機器管理運営協議会	2017年4月～現在	武庫川女子大学看護学部の代表として大型機器管理運営協議会のメンバーとして、大型機器の共同利用機器として一元管理し、効率的な利用・運用を図るために検討している。また、共同利用の推進委より研究の活性化、女性研究h差の育成を図ることに努めている。さらに、外部からの測定依頼サンプルの受注業務等による外部資金の確保により同機器の維持管理のための財源確保に努めるとともに、産学連携、地域連携を推進している。
2. 大学での委員会等の活動：情報処理教育担当	2016年4月～現在	武庫川女子大学看護学部の情報処理教育担当の長として、看護学部の情報リテラシーのあり方について検討し、各分野の実情に合わせた対策を実践してきた。また、ICTの普及のため学生への情報に関する情報提供を行っている。これらの内容について評価も行っている。
3. 大学での委員会等の活動：看護学研究科国試キャリア担当	2015年4月～現在	武庫川女子大学看護学研究科の国試キャリア担当のメンバーとして、進路指導、就職支援、保健師国家試験受験準備・手続き・合格結果を受けての対応に関することを

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>4 その他</b>		
4. 大学での委員会等の活動：FD委員会	2015年4月～2016年3月	検討している。また委員会として活動内容を点検し、評価も行っている。 武庫川女子大学看護学部FD委員として、新任教員への研修企画、全教員への教員・研究者としての到達すべき項目と課題についての研修会を企画・運営を行った。また、教員の授業の工夫点や改善点を出してもらい、全教員でそれらを共有し活かせる事ができるように書面にまとめ配布した。
5. 大学での委員会等の活動：人権教育推進委員会	2015年4月～2017年3月	武庫川女子大学看護学部の代表として全学部の教職員からなる人権教育推進委員会のメンバーとして、大学教職員ならびに学生の人権教育のあり方について検討した。SNSなど人権に関わる問題は多様化しており、それぞれの意識改革が急務となっている。特に、人を対象とする看護学領域では人権意識の高さが求められており、学生への指導を継続して行っていく。
6. 大学での委員会等の活動：看護学研究科臨地実習委員会	2015年4月～現在	武庫川女子大学看護学研究科の臨地実習委員会のメンバーとして、看護学部臨地実習委員会との情報共有と連携に関する事、看護学研究保健師コースの実習に係る事項に関する事、臨地教授等の任命に関する事、臨地実習連携会議に関する事を検討している。また委員会として活動内容を点検し、評価も行っている。
7. 大学での委員会等の活動：情報処理教育委員会	2015年4月～2016年3月	武庫川女子大学看護学部の代表として全学部の教職員からなる情報処理教育委員会のメンバーとして、大学の情報リテラシーのあり方について検討し、各学部の実情に合わせた対策を実践してきた。また、学生への情報に関する教育として授業を企画し、その内容の検討と評価も行っている。
8. 大学での委員会等の活動：学生生活委員会	2014年4月2015年3月	千里金蘭大学看護学部学生生活委員として、感染諸対策、新入生の研修、入学式・卒業式等の大学行事の運営等を行った。学生が大学生活をスムーズに開始し、実習をはじめとする学業を身につけられるように、相談体制を整え決め細やかに対応した。また、卒業生を招いての講演会や茶話会の企画を行い、学生の進路選択についてもじっくり検討できるように支援した。
9. 大学での委員会等の活動：国家試験対策委員会	2011年4月2014年3月	千里金蘭大学看護学部国家試験対策委員として、国家試験合格に向けて1年次からの学習計画の立案と指導を行った。特に、学生の苦手分野の把握とその克服方法を検討し、学生にとって出来る、わかる、解けるを実感できるようプログラムを作成し実践した。また、国家試験合格状況から作成したプログラムを評価し、よりよい支援対策について検討を重ねてきた。
10. 大学での委員会等の活動：国際交流委員会	2005年4月～2008年3月	兵庫県立大学看護学部国際交流推進委員として、国際交流のためのプログラムの作成や実施に努めた。アメリカから講師を招聘し、看護理論の講演会を開催した。その際には、英語原稿の翻訳作業を行い、会の運営にとどまらず幅広く活動した。また、インドネシアや香港の医学系の大学との姉妹校提携のための書類作成に努めた。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>1 著書</b>				
1. ワークブック国際保健・看護基礎論	共	2016年3月発行	ピラールプレス B5版 p. 1-263	本テキストは人間の安全保障を切り口に国際保健・看護を見るという点で、これまでの看護系のテキストにはない、地球規模の持続可能な発展のために何が必要かを学ぶ事ができる内容となっている。また国際保健・看護体験のない教員が「看護の統合」科目として教授することができるように、学生とのディスカッション時に何をディスカッションすれば良いか、またディスカッションで得られるであろう考えの例も示し、誰もが国際保健・看護を考え話せるように工夫した。  本人担当部分：p. 30-54 Chapter II 世界の健康加地の背景を考えるー人間の安全保障の視点からー1. 貧困、1-1世界の貧困問題、1-2健康を支える基盤 B5版 全263項 田代順子監修、堀内美由紀・岩佐真也編集 ISBN：978-4-86194-419-8
2. 公衆衛生看護学 第2版	共	2016年12月発行	中央法規出版 B5版 p. 1-538	本書は、すべての看護職に必要な地域の情報を網羅できるように構成した公衆衛生看護のテキストである。 公衆衛生看護学概論、公衆衛生看護活動の展開、対象別公衆衛生看護活動、地域保健医療福祉行政、地域健康政策と公衆衛生看護管理・研究について1冊に収載し、保健師を目指す学生にとって活用しやすいものを心がけた。また、看護学生だけではなく、様

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>1 著書</b>				
3. 国際看護・国際保健	共	2012年01月	弘文堂	<p>々な期間で活動している看護職が地域の施策、活動を理解するためにも活用できるような内容となるように工夫した。</p> <p>本人担当部分：p. 34-45、p. 435-455 第1部第3章公衆衛生看護に必要な理論 1. プライマリヘルスケア、2. ヘルスプロモーション、3. ポピュレーションアプローチとハイリスクアプローチ 第3部第3章諸外国の公衆衛生看護活動と国際看護活動B 国際看護活動 B5版 全538項 上野 昌江、和泉 京子編 共著者名：上野 昌江、岩佐真也、ほか30名 ISBN：978-4-8058-5462-4</p> <p>国際保健という大きな枠組みの中で、とくに看護に関わる領域に焦点を当て、様々な視点から問題を捉えることができるテキストである。本書の特徴は、単に世界で起こる現象を学ぶだけでなく、そのことが私たち自身の生活とどのように関連しているのかを考えられるような構成になっていることである。その点からも本書は、理論と実践を意識した書籍である。</p> <p>本人担当部分：p. 75 実際のアフリカでの体験を通し、住民参加を基本にしたプライマリ・ヘルスケアの展開を解説している。現象の全体を捉えるとはどういう事かを実例を用いながら説明し、ニード指向性のある保健活動、保健活動への住民参加等のプライマリ・ヘルスケアの原則についても触れ、概念と実践を結び付けて捉えることができるよう工夫した。 編集 丸井英二・森口育子 共著者名：李節子、岩佐真也、ほか31名</p> <p>品質管理手順の過去10年間の技術を集約し、様々なところで行われる品質管理プロセスを示すテキストである。医学フィールドから建設工学、データ品質まで広範囲にわたる技術と手順はをカバーしている。その中で、看護を品質管理の視点で捉えることのような構造になり、そこからどのような現状が見えるのか、また看護と言う品質の管理から見える課題を提示した。一般書籍の中に、看護を品質としてとらえ記述した画期的な書籍となっている。</p> <p>共同執筆箇所：Chapter 22 「Nursing Business Modeling with UML: From Time and Motion Study to Business Modeling」、p405-414 編集：Ahmed Badr Eldin 担当箇所共著者名：Sachiko Shimizu, Rie Tomizawa, Maya Iwasa, Satoko Kasahara, Tamami Suzuki, Fumiko Wako, Ichiroh Kanaya, Kazuo Kawasaki, Atsue Ishii, Kenji Yamada, Yuko Ohno ISBN：978-953-307-971-4</p>
4. Modern Approaches To Quality Control (洋書)	共	2011年9月発行	InTech p. 1-550	<p>品質管理手順の過去10年間の技術を集約し、様々なところで行われる品質管理プロセスを示すテキストである。医学フィールドから建設工学、データ品質まで広範囲にわたる技術と手順はをカバーしている。その中で、看護を品質管理の視点で捉えることのような構造になり、そこからどのような現状が見えるのか、また看護と言う品質の管理から見える課題を提示した。一般書籍の中に、看護を品質としてとらえ記述した画期的な書籍となっている。</p> <p>共同執筆箇所：Chapter 22 「Nursing Business Modeling with UML: From Time and Motion Study to Business Modeling」、p405-414 編集：Ahmed Badr Eldin 担当箇所共著者名：Sachiko Shimizu, Rie Tomizawa, Maya Iwasa, Satoko Kasahara, Tamami Suzuki, Fumiko Wako, Ichiroh Kanaya, Kazuo Kawasaki, Atsue Ishii, Kenji Yamada, Yuko Ohno ISBN：978-953-307-971-4</p>
<b>2 学位論文</b>				
1. セネガル・サルーン地帯における生活実態を基盤にした持続可能な保健医療対策に関する研究ーセレール社会からのアプローチー	単	2011年03月	大阪大学大学院医学系研究科 学位論文集	<p>我が国の地域医療施策立案における基礎的分析の一つである保健学的な地域分析の手法を保健文化論的実態調査と組み合わせ、セネガル共和国の地域保健医療のあり方について検討した。実態把握は生活実態、受療行動、伝統医療者に対する治療実態の3視点から行った。生活実態については、民族学的参加観察法を用い、受療行動については、無作為抽出による他記式質問紙法を用いたインタビュー調査、伝統医療者への調査はインタビューと参加観察法を用いた。その結果、画一的な医療施設の役割からの脱却、安全でない売薬に対する住民の認識の変革、伝統医療の保護に向けた取り組み、一定の基準を設けた薬草師の認定、西洋医療基礎教育の中で伝統医療の知識やその治療世界を学べる機会の提供の必要性が検討された。地域診断と保健文化論的手法の統合により、地域社会にとって進めやすい具体的な地域保健医療対策を提案できた。また、これらはセネガルの保健計画立案時における基礎的データとなり得るとともに、地域密着型の保健計画立案に欠かせない持続可能性を取り入れた実践型政策としても提案できた。</p>
2. セネガル農村部における、基礎保健員の継続的活動を支える住民側の要因	単	2005年03月	兵庫県立看護大学大学院看護学研究科 学位論文集	<p>セネガルの地方において実質的に医療を支えているのは基礎保健員と言われるコミュニティ・ヘルスワーカーである。そこで、農村部で保健医療活動を実施する基礎保健員(無資格)の活動実態と、基礎保健員の継続的活動を支える住民側の要因を明らかにした。その結果、基礎保健員の選出方法、村の問題</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2 学位論文</b>				
<p>や健康問題についての住民と基礎保健員との認識の一致、基礎保健員の実施可能な役割理解、住民の基礎保健員に対する日常的な支援、保健委員の選出及び保健委員会の設置が村づくりの中に位置づけられている組織であることが要因であると考えられた。無資格のボランティアとして活動する基礎保健員にとって、単に給与が高だけでなく、日ごろから支えてくれる住民の力が必要不可欠であり、保健政策への住民参加の重要性が明らかにされた。保健という一つの局面をとおして地域全体の活性へと結びつける大きな力になることを示唆した。これらは、住民同士がエンパワーメントしあいながら、地域開発につながっていく大きな資源であると考えられた。</p>				
<b>3 学術論文</b>				
1. Traditional Healers' Practices on Traditional Medicine in Rural Senegal Villagers	共	2017年3月	Nursing Journal of Mukogawa Women's University No. 2 p. 93-104	<p>セネガル住民の実際の受療行動から、伝統医療者の治療実態を明らかにすることを目的とした。また、実態を基にした伝統医療対策について検討を試みた。調査はセネガルの地方住民を対象とし、彼らの過去3ヵ月間の受療行動から、利用した伝統医療者を把握した。同意の得られた5名の伝統医療者の診療場面への参加観察調査と彼らの価値観等の聞き取り調査を行った。伝統医療者は占い師1名、イスラーム伝道師1名、薬草師3名で、個人経営の者と伝統医療センターに勤務している者がいた。調査に協力した治療者の患者は全員慢性疾患だった。伝統医療者による問診だけで診断を下し治療方針を決める者と医療機器による検査結果を参考に治療を行う伝統医療者がいた。治療費は伝統医療者が提示する場合と患者が治療費を決めて払う場合があった。治療には植物や動物を使用していた。調査により、一部ではあるが住民の生活の中にある伝統医療の実態が明らかになった。</p> <p>本人担当部分：共同研究に付き本人担当部分抽出不可能（研究計画の立案、現地調査、分析、結果の考察、文献の調査及び論文作成全般にわたり、筆頭著者として全ての作業を遂行した） 共著者名：Maya IWASA, Yuko OHNO</p>
2. 伝統的産婆と助産師が併存する地域に住む妊産婦が期待している支援	共	2017年1月	The Journal of Senri Kinran University No. 13 p. 85-89	<p>伝統的産婆と助産師が併存する地域に住む妊産婦が、妊娠から出産、産後に至る過程で伝統的産婆や助産師に対し、どのような支援を期待しているのかを明らかにした。発展途上国で成人期まで過ごし、その間に伝統的産婆が身近に存在していた女性で、現在関西地方に在住している者を対象とした。半構成的面接法で、出産に携わる医療・看護職の活動実態、伝統的産婆の具体的活動内容、対象者の出産に対する思いなどを聞き取った。その結果、23ラベルと7カテゴリーが抽出され、これらは2つに大別できた。それは、「直接的医療行為に対する近代医療への強い期待」、「妊娠から出産、産後まで一貫した人間的温かみのある支援の希求」であった。人員不足等の問題から、地域に根付き活動している伝統的産婆と助産師が役割分担して実施する必要があると考えられた。</p> <p>本人担当部分：共同研究に付き本人担当部分抽出不可能（研究計画の立案、現地調査、分析、結果の考察、文献の調査及び論文作成全般にわたり、筆頭著者とともにほぼ全ての作業を遂行した） 共著者名：岡本光、岩佐真也</p>
3. Illness Prevalence and Healthcare Utilization Behaviors in Rural Senegal: A Population-Based Study (査読付き)	共	2014年12月	民族衛生, 第80巻6号, p. 261-275	<p>セネガルの地方における、乳幼児を含む一般住民の西洋医療と伝統医療を含めた有病率と受療プロセスを明らかにすることを目的とした。無作為抽出法により、農村（V1）から29軒、魚村2（V2）から21軒を抽出し、質問紙を用いて面接調査を行い、過去3ヵ月の罹患状況と対処行動を調査した。受療プロセスは、樹形図にまとめ可視化し、有病率は年齢区分、疾患ごとに分けて算出した。その結果、V1の有病率は1.4、V2は1.5だった。両村全体の有病率に大差はないが、疾病構造や年齢区分ごとには違いが見られ、地域や年齢を考慮した保健医療対策の必要性が示唆された。住民の受診プロセスは、西洋医療だけでなく伝統医療も含めプライマリーな医療から専門的な医療へと流れていることも示唆された。</p> <p>本人担当部分：共同研究に付き本人担当部分抽出不可能（研究計画の立案、現地調査、分析、結果の考察、文献の調査及び論文作成全般にわたり、筆頭著者としてほぼ全ての作業を遂行した） 共著者名：Maya IWASA, Sachiko SHIMIZU, Yuko OHN</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
4. セネガル共和国ファティック州における治癒までの疾患別治療費（査読付き）	共	2014年12月	The journal of Senri Kinran University, No .11、P.27-46	0  OTC医薬品や伝統医療をも網羅した、第1受療行動から治癒を含む第3受療行動までの疾患別治療費の実態を明らかにした。全疾患における治癒もしくは第3受療行動までの治療費の中央値は、V1で600Franc cfa、V2で500 Franc cfaだった。この受療行動の中にはOTC医薬品や伝統医療者の利用の治療費も含まれており、日常生活に根差した医療の視点を含んだ治療費の実態を明らかにすることができた。OTC医薬品はどの治療方法よりも安く、専門医療機関になるほど治療費が高くなることも明らかとなった。地理的特徴により受診しにくいことが、OTC医薬品の備蓄と使用につながっている可能性も考えられた。パイロットエリアを内陸部と島としたことで、本研究で明らかになった治療費の実態はセネガルの地理的特徴を踏まえた、今後の保健医療対策立案のための基礎的資料になるものと考えられた。  本人担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能（研究計画の立案、データ収集・分析、結果の考察、文献の調査及び論文作成全般にわたり、筆頭著者としてほぼ全ての作業を遂行した） 共著者名：岩佐真也、森本安紀、大野ゆう子
5. テキストマイニング手法を用いた参与観察データの多角的視点分析（査読付き）	共	2013年12月	The journal of Senri Kinran University, No .10、p.39-46	参与観察データをテキストマイニングで分析することにより、観察者が捉えた現象を多角的にみるための視点を明らかにするため、既存の参加観察データを対象とし、構成要素を抽出した。テキストマイニングにより、609語の全構成要素を得た。全構成要素における高頻度の出現頻度である構成要素が必ずしも各領域での高頻度の特徴語になっているわけではなく、低頻度の特徴語として現れているものもあった。低頻度の特徴語は、調査者が各領域のデータを収集する際に見落としがなかったかといった注意喚起を与えてくれる可能性があると考えられる。またこの注意喚起は、その後のデータ収集の際の新たな視点として活用されることで、各領域だけでなく、データ全体像の捉えなおしにもつながると考えられた。  本人担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能（研究計画の立案、データ分析、結果の考察、文献の調査及び論文作成全般にわたり、筆頭著者としてほぼ全ての作業を遂行した） 共著者名：岩佐真也、大野ゆう子
6. Cost-effectiveness analysis of a pertussis vaccination programme for Japan considering intergeneration infection（査読付き）	共	2013年06月	Vaccine, 31(27)、p.2891-2897	青春期のジフテリア？破傷風（DT）ワクチン・プログラムを変えるための予防接種の費用効果の評価した。評価にはマルコフモデルを適応させ、若者/大人から幼児まで世代間の感染症を考慮し、コスト、寿命、利益-コスト比率（BCR）と付加される費用効果比率（ICER）に関して分析した。 その結果、以前行われていた青春期のDTaP予防接種の費用効果がよいことが明らかになった。予防接種の費用効果分析の結果が発生率に応じて大いに変化していることから、百日咳発生率のより正確な報告は必要とされることが示唆された。  本人担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能（研究の立案、研究の実施、結果の考察、文献の調査及び論文作成全般にわたり、実働的に共同研究に当たった） 共著者名：Tomoya Itatani, Sachiko Shimizu, <u>Maya Iwasa</u> , Yasushi Ohkusa, Kazuo Hayakawa
7. セネガル農村部における基礎保健員の継続的活動を支える住民側の要因（査読付き）	単	2012年12月	The journal of Senri Kinran University, No .9、p.47-56	セネガルの農村部において、基礎保健員の継続的活動を支える住民側の要因を、プライマリ・ヘルスケアの住民参加という視点から明らかにした。方法は、セネガル共和国C郡にある、9村の保健小屋にかかわっている住民（村長・自治会役員・保健委員・基礎保健員）に対し、住民の基礎保健員への関わりと必要性、役割認識、基礎保健員の活動上の問題と対処行動、保健委員の活動等について、家庭訪問による質問紙を用いた面接調査である。本研究により、基礎保健員が実施可能な範囲の活動を住民が理解することや、基礎保健員の活動上の問題に対して話し合いを通して対処行動を見出す力をもつことが必要であることが分かった。また、それをリードする保健委員会組織の存在と、村全体の発展を目指して保健活動に携わる保健委員の総合的視点が重要であることが明らかになった。これらは、住民自身がエンパワーメントされ、またエンパワーメントし、組織

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
8. The study on the visualization of utilization behaviors in health care in Africa by Unified Modeling Language (査読付き)	共	2011年12月	The journal of Senri Kinran University, No. 8, p. 96-103	<p>化へとつながる一連のプロセスを明らかにした。</p> <p>UMLを用いて過去一年間に罹患した病気の受療行動を可視化し、効果的な保健医療支援の可能性を検討する事を目的とした。来日したアフリカ5カ国の保健医療関係者計11名を対象とし、過去一年間に罹った病気の対処行動を質問紙調査と面接調査により把握した。保健医療関係者の受療形態は、病院をはじめとする現代医療中心の形態を成しており、対象国により保健医療システムに違いはあるが、保健センター、病院、伝統医療(薬草師)に大別することができた。また、UMLを用い対象者各々の受診のプロセスをアクティビティ図に集約することで、アフリカ5カ国の西洋医療と伝統医療の受療形態と受診プロセスをほぼ可視化することができた。さらに、民族や宗教は異なっても保健医療関係者であれば、ほぼ同様の受療行動であることが明らかになった。</p> <p>本人担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能(研究計画の立案、調査、結果の考察、文献の調査及び論文作成全般にわたり、筆頭著者としてほぼ全ての作業を遂行した)</p> <p>共著者名：Maya IWASA、Yuko OHNO、Sachiko SHIMIZU</p>
9. Nursing Business Modeling with UML:From Time and Motion Study to Business Modeling (査読付き)	共	2011年10月	InTech Quality Control, 22, p. 405-414	<p>看護業務のモデリングをUML手法をもちいて分析した研究である。慢性期病棟を対象として、24時間の他記式タイムスタディーを行った。病棟では看護師だけでなく、看護助手やクラークといったスタッフも看護業務の遂行には重要な役割を果たしていることから、従来のタイムスタディーよりも対象層を広げ調査を行った。また、その時点ごとの動きに、時間の経過情報を加味して分析を行った。その結果、中断業務を始め、看護業務の一連の流れが明らかになった。さらに、業務を支える人の動きや関わりが時の流れと共に描き出され、看護業務を構造的にとらえることができた。</p> <p>本人担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能(研究の立案、研究の実施、結果の考察、文献の調査及び論文作成全般にわたり、実働的に共同研究に当たった)</p> <p>共著者名：Sachiko Shimizu, Rie Tomizawa, Maya Iwasa, Satoko Kasahara, Tamami Suzuki, Fumiko Wako, Ichiroh Kanaya, Kazuo Kawasaki, Atsue Ishii, Kenji Yamada and Yuko Ohno</p>
10. Decision making factors behind the use of modern and traditional medicine of healthcare workers in five African Francophone countries (査読付き)	共	2011年01月	民族衛生 第77巻1号 p. 3-17	<p>アフリカ・フランス語圏5カ国の保健医療関係者の西洋医療と伝統医療に対する考えや認識を実際の受療行動から把握し、保健医療関係者の受療機関の決定に影響を与える要因を明らかにした。その結果、「病状に応じたより安全で効果的な医療への期待」、「専門職として生まれた価値観」及び「現在の生活環境により生み出された経済および利便性認識」が浮かび上がった。このような認識は、西洋医療支援を行なう際には導入しやすいことを意味し、WHOが提唱する伝統医療の充実を行なう際には困難を伴うことを意味している。保健医療関係者は住民にとって健康や医療を代弁し政策立案に関わる人物である。保健医療関係者は、自身の個人的認識と地域住民の認識とを混同することなく、西洋・伝統医療の両医療の充実に寄与できるよう育成される必要があることが示唆された。</p> <p>本人担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能(研究計画の立案、現地調査、結果の考察、文献の調査及び論文作成全般にわたり、筆頭著者としてほぼ全ての作業を遂行した)</p> <p>共著者名：Maya IWASA、Yuko OHNO、Anna TSUTSUI、Sachiko SHIMIZU</p>
11. 資源の乏しい地域での療育体制整備における保健所保健師及び市保健師の役割	共	2007年2月	平成17年・平成18年兵庫県立大学看護学部共同研究報告書	<p>障害児及びその親の支援ニーズを明らかにし、地域における療育体制整備に向けた保健師活動のあり方を検討する事を目的とした。療育支援サービスであるA療育教室に2005年5月から2006年3月までに参加した障害児の親17名のうち同意を得られた9名(事例)を対象とした。その結果、専門的健診・相談のあり方の再検討、親の障がい受容過程における気持ちを理解した個別性の高いかわり、就園、就学前の関係機関との調整や療育連絡会議等の効果的な機能のあり方、親の努力を認め、児の成長を的確に伝え、児、親と共に取り組んでいける療育訓練のあり方</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
12. セネガルの農村部における基礎保健員 (ASC) の選出条件 -青年海外協力隊が支援した事例から- (査読付き)	単	2007年03月	兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所紀要 第14巻 p.57-65	<p>について保護者と共に検討する事の課題が明らかとなった。</p> <p>本人担当部分：共同研究に付き本人担当部分抽出不可能 (研究の立案、研究の実施、結果の考察、文献の調査及び論文作成全般にわたり、実働的に共同研究に当たった)</p> <p>共同発表者：田中知己、中谷裕美、富井智重、駒田知子、間村優子、谷林真寿須、堂田正美、保杉弘美、広畑元美、牛尾裕子、岩佐真也、楢橋明子</p> <p>セネガルでは、国の方針として基礎保健員と呼ばれるコミュニティーヘルスワーカーの活動が期待されているが、様々な問題から継続的活動ができない場合が多い。そこで、本研究では、セネガル農村部において実際に基礎保健員の育成に関わった筆者の経験から、「人選」の問題を通して基礎保健員の適切な選出条件を明らかにした。その結果、基礎保健員の年齢や性別、配偶者の収入などが重要な選出条件であることが明らかとなった。このことは、継続的な地域医療のあり方を考える際の重要な視点であることを示唆している。</p>
<b>その他</b>				
<b>1. 学会ゲストスピーカー</b>				
<b>2. 学会発表</b>				
1. 特定健診5年未受診者への家庭訪問からみえたもの 3報 本人の困りごとと保健師の気がかり	共	2016年12月	第75回日本公衆衛生学会総会 (於：グランフロント大阪)	<p>低所得で未受療、特定健診未受診者の本人家族の困りごとの内容と、家庭訪問を通じて本人家族に対して保健師がとらえた気がかりの内容を明らかにすることを目的とした。88人の家庭訪問により把握したデータをテキストマイニング手法により分析した。内容ごとの構成要素の高出現頻度語を抽出し、それらの前方・後方の語を組み合わせてより、本人家族の困りごとの内容と訪問を行なった保健師がとらえた気がかりの内容の特徴を検討した。前方・後方の語の組み合わせを見ると同じ構成要素であっても、本人家族と保健師とでは構成要素を用いた文脈が異なり、本人家族がとらえている現状認識と保健師がとらえている現状 (課題) 認識の違いが浮き彫りになった。</p> <p>本人担当部分：共同研究に付き本人担当部分抽出不可能 (調査及び論文作成全般にわたり、実働的に共同研究に当たった)</p> <p>共著者名：岩佐 真也、葛谷 裕美、田平 昌代、守田 佳織、和泉 京子、海原 律子</p>
2. 特定健診5年未受診者への家庭訪問からみえたもの 2報 本人および家族の健康と生活状況	共	2016年10月	第75回日本公衆衛生学会総会 (於：グランフロント大阪)	<p>健診未受診で未受療である低所得者および家族の健康と生活状況を知り支援のあり方を検討することを目的とし、889名に家庭訪問を実施した。聴覚障害2人、身体障害4人、精神障害3人、知的障害1人と障害を有する者が10人 (11.4%) と1割を超えており、家族の体の調子が気がかりなことを有する者は29人 (33.0%)、介護等が必要な家族がいる者は12人 (13.6%) であり、その半数の6人 (6.8%) が複数の家族の介護等を行っていた。経済的な困りごとが最も多く「年金が少なく生活が苦しい」「急な出費は困る。家族の医療費が高い」などであった。まずは困りごとへの支援を行うことが健康の保持増進にもつながると考えられ、支援の糸口をみつけることが重要であると考えた。</p> <p>本人担当部分：共同研究に付き本人担当部分抽出不可能 (調査及び論文作成全般にわたり、実働的に共同研究に当たった)</p> <p>共著者名：田平 昌代、葛谷 裕美、守田 佳織、和泉 京子、岩佐 真也、海原 律子</p>
3. 特定健診5年未受診者への家庭訪問からみえたもの 1報 健康状態と健康行動	共	2016年10月	第75回日本公衆衛生学会総会 (於：グランフロント大阪)	<p>健診未受診で未受療である低所得者への、健康づくり支援の家庭訪問の実施の有無による家庭訪問後の特定健診受診状況を明らかにし、健診未受診への支援のあり方を検討することを目的とし、88名に家庭訪問を実施した。過去5年間あるいはそれ以上の長い期間、未受診であった者の中でも、訪問群に受診者の割合が多かったことより、アウトリーチである家庭訪問による健診受診勧奨等の健康づくり支援は有意義であると考えられる。しかしながら、訪問受入可の対象者は6.0%にとどまり、いかに出会い、支援の糸口を見つけていくかが大きな課題であり、支援の方策を検討していく。</p>



研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
4. 国保特定健診5年未受診者の家庭訪問後の健康行動-特定健診受診および医療機関受診の1年後の継続状況	共	2015年8月	日本地域看護学会第18回学術集会(於：バンフイコ横浜)	<p>本人担当部分：共同研究に付き本人担当部分抽出不可能(調査及び論文作成全般にわたり、実働的に共同研究に当たった)</p> <p>共著者名：葛谷 裕美、田平 昌代、守田 佳織、和泉京子、岩佐 真也、海原 律子</p> <p>特定健診未受診、未受療でかつ低所得者への家庭訪問による健康支援後の特定健診受診と医療機関受診の1年後の継続状況を明らかにし、特定健診未受診者への支援のあり方を検討することを目的とし、29名に家庭訪問を2回実施した。特定健診を訪問後の25年度、26年度とも5名(17.2%)が受診した。要治療のうち2人は未受療、3人が治療につながったが1年後には1人が中断していた。健診や医療から長く遠ざかっていたにも関わらず健診や治療をした者がいることから、出向き丁寧にかかわることが健康行動につながることを示唆されたが、生活習慣病発症・重症化予防のために継続するには健康行動の維持への働きかけが必要であると考える。</p>
5. Possibilite d' une medecine sur mesure nee de la fusion de la medecine occidentale et de la medecine traditionnelle ?	共	2015年6月	International Council of Nurses 2015 Congress and CNR (於：Seoul, Republic of Korea)	<p>本人担当部分：共同研究に付き本人担当部分抽出不可能(文献の調査及び論文作成全般にわたり、実働的に共同研究に当たった)</p> <p>共著者名：和泉京子、岩佐真也、海原律子</p> <p>伝統医療の治療内容や伝統医療施設の運営実態を明らかにし、実態から西洋医療と伝統医療が融合したオーダーメイド医療が可能かどうかを考察した。セネガル、ファティック州の住民が利用した伝統医療施設で参与観察と治療者・施設管理者へのインタビューを行った。その結果、様々な医療体系が存在した。エビデンスを求めながらも全人的治療を希望する患者には、診断までを西洋医療で、治療を伝統医療で行うという選択も可能となり、患者のニーズに合わせた両医療の融合によるオーダーメイド医療の可能性が示唆された。</p>
6. テキストマイニング手法を用いた参与観察データの多角的視点分析	共	2014年11月	第55回日本熱帯医学会大会・第29回日本国際保健医療学会学術大会合同大会 (於：国立国際医療研究センター)	<p>本人担当部分：共同研究に付き本人担当部分抽出不可能(研究計画の立案、現地調査、結果の考察、文献の調査及び論文作成全般にわたり、筆頭著者としてほぼ全ての作業を遂行した)</p> <p>共著者名：Maya Iwasa, Kyoko Izumi, Rituko Kaibara</p> <p>参与観察データをテキストマイニングで分析することにより、観察者が捉えた現象を多角的にみるための視点を明らかにするため、既存の参加観察データを対象とし、構成要素を抽出した。全構成要素における高頻度の出現頻度である構成要素が必ずしも各領域での高頻度の特徴語になっているわけではなく、低頻度の特徴語として現れているものもあった。低頻度の特徴語は、調査者が各領域のデータを収集する際に見落としがなかったかといった注意喚起を与えてくれる可能性があることが示唆された。</p>
7. Coûts des traitements en fonction des symptômes et des comportements	共	2013年05月	International Council of Nurses 25TH Quadrennial Congress (於：Melbourne Australia)	<p>本人担当部分：共同研究に付き本人担当部分抽出不可能(研究計画の立案、分析、結果の考察、文献の調査及び論文作成全般にわたり、筆頭著者としてほぼ全ての作業を遂行した)</p> <p>共同発表者：岩佐真也、大野ゆう子</p> <p>セネガルの2村を対象に受療行動と治療費について調査を行い、治療費は、受療行動と疾患ごとに基本統計量を算出した。その結果、村1では、下痢、関節痛、外傷が、村2では発熱と関節痛の中央値より約2倍以上高かった。また、受療行動別では、両村とも0TCにより治療費が最も安かった。診療所では、村2の治療費が村1の1.5倍から5倍高く、同様に保健ポストも村2が村1より2倍高かった。治療費は受療段階に影響されるのではなく、受療先(受療行動)により異なると考えられた。しかし、同じ受療行動、例えば診療所や保健ポストであっても、居住地により治療費には大きな差があり、地理的環境と治療費との関連が示唆された。</p>
8. The world of nursing engineering through the practice of public health nursing in Japan	単	2012年09月	第27回生体・生理工学シンポジウム(於：北海道大学)	<p>本人担当部分：共同研究に付き本人担当部分抽出不可能(研究計画の立案、現地調査、結果の考察、文献の調査及び論文作成全般にわたり、筆頭著者としてほぼ全ての作業を遂行した)</p> <p>共著者名：Maya Iwasa、Yuko Onhno</p> <p>看護職の中でも「保健師」を切り口として看護工学について検討し、自身の経験を踏まえ、2つの保健師活動の事例を報告した。一つ目は日本での児童虐待</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
d abroad				
9. セネガルのセレール民族の生活と医療	共	2011年11月	第76回日本民族衛生学会総会（於：福岡大学）	<p>についてであり、二つ目はセネガルの農村部で暮らす乳幼児の病気発見についてである。保健師は、家庭訪問や地域巡回の際に、これらの事象に対して何らかの「武器」（道具という意味）を持って出かけることは無い。その理由の一つとして、保健師が看護学から生まれる「武器」という存在を知らないからだと考えている。そこで、二つの事例から、保健師から見た看護学への期待を述べた</p> <p>セネガルの農村と漁村に暮らすセレール民族を対象に、村民の一般生活や生活環境などの村の文化や価値観、医療への認識を明らかにするため、民族看護学の視点で参加観察を行った。分析には、我が国の地域医療施策立案における基礎的分析の一つである保健学的な地域分析の手法を用いた。その結果、地理的環境が受療行動に影響し、伝統医療薬や西洋医療薬に関わらず医薬品を備える文化を生み出していることが示唆された。</p>
10. 受療行動と治療費：セネガル、ファティック州での住民調査	共	2011年11月	第52回日本熱帯医学会大会 第26回日本国際保健医療学会学術大会 合同大会（於：東京大学）	<p>本人担当部分：共同研究に付き本人担当部分抽出不可能（研究計画の立案、現地調査、結果の考察、文献の調査及び論文作成全般にわたり、筆頭著者としてほぼ全ての作業を遂行した） 共同発表者：岩佐真也、大野ゆう子、清水佐知子</p> <p>疾患と治療費、OTCや伝統医療を含む受療行動と治療費の実態を明らかにするため、セネガルのファティック州にある内陸部農村（A村：100世帯人口約800人）と島部漁村（B村：80世帯人口約1,000人）をパイロットエリアとし、無作為に抽出された世帯の全成員に対し、過去3ヶ月間に罹患した疾患の受療行動と費用を他記式質問紙法により調査した。受療行動段階別、疾患別、治療方法別の治療費（直接経費）を統計的に算出し、受療行動と治療費の実態を明らかにした。これらの実態は、コスト面から見た保健計画の在り方を提案するものとなった。</p>
11. Nursing Engineering Application to Public Health Nursing	単	2011年09月	The 26th Symposium on Biological and Physiological Engineering（於：Shiga, Japan）	<p>本人担当部分：共同研究に付き本人担当部分抽出不可能（研究計画の立案、現地調査、結果の考察、文献の調査及び論文作成全般にわたり、筆頭著者としてほぼ全ての作業を遂行した） 共同発表者：岩佐真也、大野ゆう子、清水佐知子</p> <p>看護工学分野のオーガナイズド・セッションで発表した。現在、看護工学が脚光を浴びており、転倒予防や見守りシステム、洗髪ロボットなど、看護と工学は今や切り離せないものとなっている。しかしこれらは、療養・治療を必要とする者や彼らが暮らす院内や在宅という限られた場での看護工学技術の展開に過ぎないのではないかと考えている。そこで我々看護職の中でも「保健師」を切り口として看護工学を探り、療養者・患者といった個ではなく、住民という集団の中での看護工学の今後の姿を提案した。</p>
12. 多言語対応問診システムの開発	共	2011年06月	ITヘルスケア学会第五回年次学術大会（於：大阪大学）	<p>訪日した外国人が急病などで日本の医療機関にかかる際に、大きな問題となるのが「言葉」である。教育研究機関・民間企業・NPOなども問診票作成等の取り組みを行っているが、十分なシステムが普及しているとは言えない。そこで我々は、視聴覚を利用出来るアンドロイド端末に着目し、アニメーションや音声を使用することで直感的に質問内容が把握できる多言語対応問診票を設計試作し、限定的ではあるが訪日外国人による評価まで実施した。今後、改良を重ねることで、日本のみならず世界での実用化に向けアプローチできるものが出来上がった。</p>
13. セネガルにおける地理的環境の異なる地域住民の主観的重症度と受療行動の比較	共	2010年09月	第25回日本国際保健医療学会（於：日本赤十字九州国際看護大学）	<p>本人担当部分：共同研究に付き本人担当部分抽出不可能（問診項目内容の検討、各言語に翻訳する際の症状の表現方法の検討、システムの利用調査、結果の考察、文献の調査など実働的に共同研究に当たった） 共同発表者：小川大一、清水恵、岩佐真也、濱谷恵子</p> <p>セネガルの農村と漁村に居住する住民の罹患状況と対処行動から、地理的環境の違いによる主観的重症度と受療行動の関連を明らかにした。その結果、農村では、プライマリーな医療手段として保健小屋が位置づき、軽症での利用という早期受診が実践されている。一方、漁村では主観的重症度が重度な者が多いにもかかわらず、OTC医薬品が医療施設と同等の価値を付与されており、主観的重症度に関係なく受療行動がとられていた。このことはセネガルにおける保健医療政策の具体的検討を行う際の「地域性」の考慮の在り方を提示するものとなった。</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
14. タイムプロセススタディ手法を用いた外来化学療法部門の業務分析と増床前後の治療待ち時間比較	共	2010年05月	ITヘルスケア学会 第4回年次学術大会（於：東京大学）	<p>本人担当部分：共同研究に付き本人担当部分抽出不可能（研究計画の立案、現地調査、結果の考察、文献の調査及び論文作成全般にわたり、筆頭著者としてほぼ全ての作業を遂行した） 共同発表者： <u>岩佐真也</u>、大野ゆう子、清水佐知子、山川祐子</p> <p>がん患者の早期退院に伴い、病院では外来化学療法部門を設置することが多くなっている。外来にて抗がん剤を用いた高度な治療を行うため、安全性の確保と治療の質の確保が重要である。そこで、外来化学療法部門に携わる医療関係者の業務プロセスを明らかにし、その特性を把握することで安全確保の実態と条件を明らかにした。その結果、病院構造やシステム形態が患者移動の必要性や医療者業務の複雑さを生じ、患者の治療待ち時間を長引かせていることが明らかとなった。</p>
15. 手術台の縦転・横転が及ぼす体圧の変化	共	2010年03月	生体医工学シンポジウム2010（於：北海道大学）	<p>本人担当部分：共同研究に付き本人担当部分抽出不可能（研究の立案、研究の実施、結果の考察、文献の調査及び論文作成全般にわたり、実働的に共同研究に当たった） 共同発表者：坂田奈津美、大野ゆう子、清水佐知子、横内光子、<u>岩佐真也</u>、大西喜一郎、王媛媛、山田憲嗣、金谷一朗、田墨恵子、水木満佐央</p> <p>手術中の長期間の一定体位はその必然性から十分議論されていないのが実情である。そこで本研究では、腹腔鏡下で行われる術式の中で多いとされる仰臥位で手術台を水平位、縦転、縦転と横転の3条件で体圧変化を測定し検討した。その結果、S位に比べてHUR位の仙骨部の体圧は有意に上昇を認めた。全身麻酔や手術といったクリティカルな状況下にある患者の身体は褥創発生の危険性が高いだけでなく、手術台の縦転・横転による体圧の上昇も危険因子の一つとして考慮すべきであることが示唆された。</p>
16. An Interactive, Multimodal Visualization and Analysis System for Time Motion Study	共	2009年11月	6th Asia Pacific Association for Medical Informatics Proceeding s6（於：HIROSHIMA, JAPAN）	<p>本人担当部分：共同研究に付き本人担当部分抽出不可能（研究の立案、研究の実施、結果の考察、文献の調査及び論文作成全般にわたり、筆頭著者はじめ全著者に対する指揮と指導を行った） 共同発表者：田中 範佳、大野 ゆう子、山田 憲嗣、<u>岩佐 真也</u></p> <p>タイムスタディの分析業務は、従来まではエクセルなどを用いてすべての情報を手動で入力しており、多大な労力と入力ミスがあった。また、ある特定の条件下での業務の抽出が難しかった。本研究では、これらを改善できるシステムの構築を実際の看護師業務のタイムスタディデータから行った。複雑に活動する看護師の全ての行動を秒単位で把握し、同時に複数の業務を行う際の業務分析や予期せぬ予定が入り中断してしまった業務についても抽出できるようなシステムが構築でき、問題解決に貢献した。</p>
17. Social Interaction in Risky Behavior by College Student in Japan	共	2009年11月	6th Asia Pacific Association for Medical Informatics Proceeding s6（於：HIROSHIMA, JAPAN）	<p>本人担当部分：共同研究に付き本人担当部分抽出不可能（研究の立案、研究の実施、結果の考察、文献の調査及び論文作成全般にわたり、実働的に共同研究に当たった） 共同発表者：Lin, J., Ohno, Y., Ishii, A., Shimizu, S., Susuki, Y., Noda, H., <u>Iwasa, M.</u>, Yoshioka, N., Wang, L., Numasaki, H.</p> <p>日本の大学生を対象に、リスク選好における社会的相互作用について明らかにすることを目的とした。リスクの内容としてアンダーソンの先行研究をもとに、喫煙、避妊しない性交渉、飲酒、シートベルトの着用有無などを取り上げた。その結果、大学単位、クラス単位での社会相互作用があり、それらにはpeerが存在していることが明らかとなった。それらにはpeer行動の知覚、現在のpeer行動、最も親しい友人3人の現在の行動であった。大学生のこのような3つのpeer行動は社会相互作用として働いていることが示唆された。</p> <p>本人担当部分：共同研究に付き本人担当部分抽出不可能（研究の立案、研究の実施、結果の考察、文献の調査及び論文作成全般にわたり、実働的に共同研究に当たった） 共同発表者：Shimizu, S., Ohno, Y., Ohnishi, K., <u>Iwasa, M.</u>, aoyahan, Mochimaru, Y., Wang, Y., Y.</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
18. アフリカ諸国フランス語圏における医療の行方	共	2009年10月	第68回日本公衆衛生学会総会（於：奈良県立文化会館）	<p>アフリカ諸国の保健医療関係者における受療機関（現代医療と伝統医療）の決定に影響を与える要因を分析し、西洋医療と伝統医療という両者の受療行動について検討した。その結果、西洋医療教育を受けた対象者の伝統医療への認識は、一部の者を除き、大半は否定的であった。西洋医療関係者のこのような否定的認識は、持続可能な発展途上国の保健医療の在り方を考える上で、現地医療関係者の伝統医療への価値認識を高め、伝統医療の質的向上を図る支援の必要性を示唆した。</p> <p>本人担当部分：共同研究に付き本人担当部分抽出不可能（研究計画の立案、現地調査、結果の考察、文献の調査及び論文作成全般にわたり、筆頭著者としてほぼ全ての作業を遂行した） 共同発表者：岩佐真也、大野ゆう子、志岐直美、筒井杏奈、清水佐知子、持丸祐子</p>
19. Social Interaction in Risky Behavior by College Student in Japan	共	2009年07月	7th World Congress on Health Economics/World Congress on Health Economics（於：Beijing, CHINA）	<p>リスク選好について、大学生を対象に基本属性及び危険行動（飲酒・喫煙・シートベルトの着用・避妊しない性行為など）との関連を調査した。これらの危険行為は数値化し、対象である大学生が結果を統計的に理解できるよう工夫した。その結果、リスク選好は喫煙、飲酒及びダイエットにおいては優位にリスク選好と関連があった。特に女性ではダイエットは非常にリスク選好と関連していたことが明らかになった。大学生のこのようなリスク選考の実態は、思春期保健を捉える上でより実践に即した対応の検討を可能にすることに貢献する。</p> <p>本人担当部分：共同研究に付き本人担当部分抽出不可能（研究の立案、研究の実施、結果の考察、文献の調査及び論文作成全般にわたり、実働的に共同研究に当たった） 共同発表者：Shimizu, S.、Yoshioka, N.、Iwasa, M.、Yahan, G.、Ohno, Y.</p>
20. Analyse Des Facteurs De Decision Pour Les Etablissements Medicaux En Afrique : Choix Entre La Medecine Moderne Et La Medecine traditionnelle	共	2009年06月	The International Council of Nurses 24TH QUADRENNIAL CONGRESS（於：Darban, SOUTH AFRICA）	<p>アフリカ諸国の保健医療関係者における受療機関（西洋医療と伝統医療）の決定に影響を与える要因を検討した。その結果、受療機関の決定に影響を与えている要因として9カテゴリーが抽出され、これらは2つに大別できた。「病状に応じたより安全で効果的な医療への期待」と「生活環境と専門職として育まれた価値観」である。前者には、5つのカテゴリーが該当した（適切な診断と治療効果など）。後者には、4つのカテゴリーが該当した（伝統医療への否定的肯定的認識など）。保健医療関係者のこのような認識は、今後の専門職育成時に考慮すべきことを示唆することとなった。</p> <p>本人担当部分：共同研究に付き本人担当部分抽出不可能（研究計画の立案、現地調査、結果の考察、文献の調査及び論文作成全般にわたり、筆頭著者としてほぼ全ての作業を遂行した） 共同発表者：Iwasa, M.、Ohno, Y.、Shiki, N.、Tsu tsui, A.</p>
21. 喫煙行動における社会的相互作用の影響に関する実証研究	共	2009年03月	第79回日本衛生学会総会（於：東京大学）	<p>大学生を対象に、社会的相互作用が喫煙行動に与える影響を分析し、社会的相互作用下での個人の健康行動を定式化することを目的とした。その結果、喫煙行動に対する統計学的に有意な社会的相互作用効果が確認された。一方で、性別や個人のリスク選好といった変量も喫煙行動確率を上げる影響要因であることが示唆された。喫煙開始が始まる年齢層の社会相互作用での喫煙行動確率を明らかにすることで、中学生や高校生を対象とした健康教育の充実や生活環境の整備の具体的取り組みが行なえる成果を得た。</p> <p>本人担当部分：共同研究に付き本人担当部分抽出不可能（研究の立案、研究の実施、結果の考察、文献の調査及び論文作成全般にわたり、実働的に共同研究に当たった） 共同発表者：清水佐知子、吉岡なつき、持丸祐子、岩佐真也、大野ゆう子</p>
22. 県内保健所、保健センターにおける地域看護実習指導の現状と保健師の認識（第1報）	共	2008年11月	第67回日本公衆衛生学会総会（於：福岡国際会議場）	<p>兵庫県では保健師養成を行う大学が10校を超え、実習のあり方が模索されている。県内健康福祉事務所、保健所、市町の保健師実習指導体制の現状と、実習に関わる保健師の認識を明らかにした。保健所と市町の業務役割特性が、学生に体験させることができる実習内容として反映されていた。市町では、実習指導業務について事務分掌で明らかにされていない</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
23. 大学間共同・大学自治体間共同による地域看護実習指導者研修の試み  ー学士課程保健師教育における臨地実習指導体制づくりモデルの作成ー	共	2008年11月	2008年度兵庫県立大学研究発表会（於：兵庫県立大学）	<p>いなど課題があり、今後は、実習に関わる大学・県が協力して、市町の実習実施のための体制づくりに取り組む必要があると考えられた。</p> <p>本人担当部分：共同研究に付き本人担当部分抽出不可能（研究計画の立案、現地調査、結果の考察、文献の調査及び論文作成全般にわたり、筆頭著者としてほぼ全ての作業を遂行した） 共同発表者：岩佐真也、牛尾裕子、松田宣子、岩本里織、柏葉三千子、菅野夏子、富永真己、大井美紀、伊東愛、榎橋明子</p> <p>大学間共同および大学と実習施設との共同で臨地実習指導体制の方向性を探ることを目的とし研究を行った。具体的には大学間ワーキンググループによる実習の概要・現状・課題の検討を行った。また、実習受け入れ施設に対する実習指導体制の現状と保健師の実習に対する認識を調査した。さらに、先進的取り組みを行っている県との情報交換を行い、新たな実習指導体制のモデルを作成した。今後の保健師教育を行うにあたり、現場と教育がより連動した体制の道筋が明らかになった。</p>
24. 県内保健所、保健センターにおける地域看護実習指導の現状と保健師の認識（第2報）ー実習担当保健師への調査からー	共	2008年11月	第67回日本公衆衛生学会総会（於：福岡国際会議場）	<p>本人担当部分：共同研究に付き本人担当部分抽出不可能（研究の立案、研究の実施、結果の考察、文献の調査及び論文作成全般にわたり、実働的に共同研究に当たった） 共同発表者：牛尾裕子、伊東愛、榎橋明子、岩佐真也、松田宣子、藤原恵美子</p> <p>第1報に引き続き、兵庫県下での保健師育成の実習について検討した。保健所、市町の実習に関わる保健師が、実際に実施した実習指導内容項目とそれに対する困難感、またそれらの内容について大学教員と施設側実習指導者のどちらが担うべきかを調査した。その結果、実習指導の役割については、大学教員と施設側指導者の両方が担うとした項目が多かった。その内容は、実習体験により生じた疑問への対応、家庭訪問の指導及び健康教育の指導などであった。これの実態から、現場と協働した実習指導内容を検討することにつながった。</p>
25. アフリカ諸国における受療機関決定要因分析：現代医療と伝統医療の選択	共	2008年10月	第49回日本熱帯医学大会、第23回日本国際保健医療学会学術大会合同大会（於：東京大学）	<p>本人担当部分：共同研究に付き本人担当部分抽出不可能（研究の立案、研究の実施、結果の考察、文献の調査及び論文作成全般にわたり、筆頭著者はじめ全著者に対する指揮と指導を行った） 共同発表者：榎橋明子、牛尾裕子、松田宣子、岩本里織、柏葉三千子、菅野夏子、富永真己、大井美紀、伊東愛、岩佐真也</p> <p>アフリカ諸国の保健医療関係者における受療機関（現代医療と伝統医療）の決定に影響を与える要因を質的帰納的に分析した。伝統医療と現代医療に対する肯定的否定的認識は、幼少期の生活体験を基にし、現代医療専門職としての医療への信頼と、伝統医療への伝承的・経験的価値判断に大きく影響されている。また、保健医療関係者として、治療、診断、処方についての科学的根拠や施術者としての公的認可の有無を重視する一方、非科学的と認識している伝統医療への期待も持っていることが明らかになった。</p>
26. UML手法を用いたアフリカ諸国における受療行動の検	共	2008年09月	生体医工学シンポジウム2008（於：大阪大学）	<p>本人担当部分：共同研究に付き本人担当部分抽出不可能（研究計画の立案、現地調査、結果の考察、文献の調査及び論文作成全般にわたり、筆頭著者としてほぼ全ての作業を遂行した）</p> <p>伝統医療が息づく地域での受療行動を明らかにすることを目的として、聞き取り調査を基にUMLによる受療行動分析を行った。対象は、アフリカ5カ国の保健医療関係者計11名。調査項目は、過去一年間の受療先と選択理由及び西洋医療と伝統医療への認識についてである。病気の知覚から医療機関（伝統医療を含む）を受診するまでのプロセスを、UML手法を用い可視化し比較検討した。その結果、病気の知覚から治療までのプロセスでどのようなアクションがなされているのかが明らかになった。</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
27. 自然災害時の被災地域看護専門職支援における課題	共	2008年07月	日本地域看護学会第11回学術集会（於：琉球大学）	<p>共同発表者：岩佐真也、大野ゆう子</p> <p>自然災害発生時、被災自治体保健師と応援派遣された保健師・看護師が協力し、避難所や地域での看護活動が効率的に実施できるための看護専門職支援の課題を明らかにすることを目的とした。対象は、避難所や地域での災害看護活動経験者10名を研究協力者として行なった。「災害時の避難所・地域における看護師同士の協働の課題と展望」をテーマに検討した。その結果、被災地域看護専門職支援ネットワーク構成要素として、マンパワー、組織内ネットワーク、調整機能にまとめられ、今後確立していくべき課題が明らかになった。</p> <p>本人担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能（研究の立案、研究の実施、結果の考察、文献の調査及び論文作成全般にわたり、実働的に共同研究に当たった）</p>
28. 地域看護実践能力育成に向けた教員と現地指導保健師との協働による実習指導方法の開発（第1報）  ～実習の協働企画における要件～	共	2007年7月	第10回日本地域看護学会学術集会（於：神奈川県立保健福祉大学）	<p>共同発表者：牛尾裕子、渡邊智恵、田村須賀子、伊東愛、楢橋明子、岩佐真也、井伊久美子</p> <p>今年度カリキュラムの改正を受け地域看護実習内容を新たに組み立てることとなった。実習指導の質の向上のため、企画の段階から保健師と昨年度2回、今年度2回検討会議を実施してきた。本研究ではこのプロセスを評価し、実習を保健師と協働企画する上での要件を明らかにすることを目的とした。その結果、協働企画のプロセスでは実習のねらいを学生の学びの実態と共に示すこと、保健師の経験や思い・意見を語る工夫を行うことが必要であった。また実習中・後も保健師の意見を確認しながら実習に取り組む必要があることが示唆された。</p> <p>本人担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能（研究の立案、研究の実施、結果の考察、文献の調査及び論文作成全般にわたり、実働的に共同研究に当たった）</p>
29. 地域看護実践能力育成に向けた教員と現地指導者との協働による実習指導方法の開発～実習を受け入れた施設側の現状・課題と教員の实習指導役割に対する評価～	共	2007年11月	2007年度兵庫県立大学研究発表会（於：兵庫県立大学）	<p>共同発表者：伊東愛、牛尾裕子、岩佐真也、楢橋明子、井伊久美子</p> <p>新カリキュラムによる地域看護実習の計画・実施・評価のプロセスを、現地指導者の参画を得て実施し、これを分析し、現地指導者と大学教員との協働による効果的な実習指導の方法を検討することを目的とした。その結果、実習における意見として「現場では十分時間を使って体験したことが聞けない」といった学生との学びの共有の困難さや、「学生単独家庭訪問対象者を準備しづらい」といった保健師の置かれている現状の中で大学側が希望するプログラム内容を組み立てる困難さ、今までの本学の実習との比較による新実習形態に対する戸惑いがあることが明らかとなった。</p> <p>本人担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能（研究の立案、研究の実施、結果の考察、文献の調査及び論文作成全般にわたり、実働的に共同研究に当たった）</p>
30. 地域看護実習教育における大学と現地保健師との協働～実習終了後の会議を通して～	共	2007年10月	第66回日本公衆衛生学会学術集会（於：愛媛県民文化会館）	<p>共同発表者：牛尾裕子、岩佐真也、伊東愛、楢橋明子、井伊久美子</p> <p>実習終了後に全ての実習施設の保健師とともに実習の評価を行う会議を開催し、会議での指導保健師の発言の分析から、実習終了後の指導保健師との実習振り返りの意味や協働の在り方を明らかにすることを目的とした。実習受け入れ施設38か所中、研究協力に同意が得られたものは21名であった。実習を検討する上での課題として「実習担当保健師が実習受け入れ調整を容易にするための支援の必要性」「保健師が学生の学びを十分とらえられることのできる指導体制の確保の必要性」「実習担当保健師が実習に関わりやすくするための大学の支援の必要性などが見出された。</p> <p>本人担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能（研究の立案、研究の実施、結果の考察、文献の調査及び論文作成全般にわたり、実働的に共同研究に当たった）</p>
31. 健康危機管理にかかわる保健師のためのシュミレーションプログラムの開発・試行	共	2006年7月	第9回日本地域看護学会学術集会（於：国立保健医療科学院）	<p>共同発表者：楢橋明子、牛尾裕子、伊東愛、岩佐真也、井伊久美子</p> <p>健康危機管理におきて保健師機能を発揮する上では発生時即時的な応用的な判断と行動を導く役割認識であるとの考えを基にしたプログラムを作成し、その有用性を3箇所での研修により評価する事を目的と</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
32. 資源の乏しい地域での療育体制整備における健康福祉事務所保健師及び市保健師の役割	共	2006年11月	2006年度兵庫県立大学研究発表会 (於：兵庫県立大学)	<p>した。その結果、開発した演習方法は、健康危機を経験した保健師の経験知を経験しないものへ伝承する方法として有用と考えられた。</p> <p>本人担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能（研究の立案、研究の実施、結果の考察、文献の調査及び論文作成全般にわたり、実働的に共同研究に当たった） 共同発表者：牛尾裕子、伊東愛、岩佐真也、藤井広美、井伊久美子</p> <p>障害児及びその親の支援ニーズを明らかにし、地域における療育体制整備に向けた保健師活動のあり方を検討する事を目的とした。療育支援サービスであるA療育教室に2005年5月から2006年3月までに参加した障害児の親17名のうち同意を得られた9名10事例を対象とした。その結果、専門的健診・相談のあり方の再検討、親の障がい受容過程における気持ちを理解した個別性の高いかわり、就園、就学前の関係機関との調整や療育連絡会議等の効果的な機能のあり方などの課題が明らかとなった。</p>
33. 大規模台風災害発生時の市町保健師の対応	共	2006年10月	第65回日本公衆衛生学会総会 (於：富山県 富山県民会館・富山国際会議場)	<p>本人担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能（研究の立案、研究の実施、結果の考察、文献の調査及び論文作成全般にわたり、実働的に共同研究に当たった） 共同発表者：田中知己、中谷裕美、富井智重、駒田知子、間村優子、谷林真寿須、堂田正美、保杉弘美、広畑元美、牛尾裕子、岩佐真也、楢橋明子</p> <p>実際の大规模台風災害被害を受けた市町保健師に対しインタビューを行い、保健師の支援について検討した。その結果、初動活動はもちろんの事、保健師には【危機への対応】【情報管理】【体制整備】【連携】【信頼関係の構築】の5つの役割・能力が求められていたことが明らかとなった。</p>
34. セネガル農村部における、基礎保健員の継続的活動を支える住民側の要因	単	2005年11月	第19回日本国際医療保健学会 (於：東京大学)	<p>本人担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能（研究の立案、研究の実施、結果の考察、文献の調査及び論文作成全般にわたり、実働的に共同研究に当たった） 共同発表者：牛尾裕子、長通貴子、小川和江、伊東愛、岩佐真也、楢橋明子、井伊久美子、白石都、坪井志保美</p> <p>セネガルの農村部において、基礎保健員の継続的活動を支える住民側の要因を、プライマリヘルスケアの住民参加の視点から明らかにした。その結果、基礎保健員の選出方法の公平性、住民と基礎保健員の問題認識の一致、健康問題に関して住民同士もしくは保健ポストの看護師等との話し合いの実施、住民の基礎保健員に対する日常的な支援、保健委員会が村づくりの中に位置づけられていることが明らかとなった。 発表者：岩佐真也</p>
35. セネガル農村部における、基礎保健員の継続的活動を支える住民側の要因	単	2005年11月	第19回日本国際医療保健学会 (於：東京大学)	<p>本人担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能（研究の立案、研究の実施、結果の考察、文献の調査及び論文作成全般にわたり、実働的に共同研究に当たった） 発表者：岩佐真也</p> <p>セネガルの農村部において、基礎保健員の継続的活動を支える住民側の要因を、プライマリヘルスケアの住民参加の視点から明らかにした。その結果、基礎保健員の選出方法の公平性、住民と基礎保健員の問題認識の一致、健康問題に関して住民同士もしくは保健ポストの看護師等との話し合いの実施、住民の基礎保健員に対する日常的な支援、保健委員会が村づくりの中に位置づけられていることが明らかとなった。 発表者：岩佐真也</p>
36. セネガル共和国における、コミュニティヘルスワーカーの適切な人選—青年海外協力隊が支援した一事例から重要な選出条件を考える—	単	2004年03月	第22回日本国際医療保健学会・西日本地方会 (於：兵庫県立看護大学)	<p>本人担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能（研究の立案、研究の実施、結果の考察、文献の調査及び論文作成全般にわたり、実働的に共同研究に当たった）</p> <p>発展途上国において地域医療を支えているコミュニティ・ヘルス・ワーカーは、簡単な医療教育を受けただけのボランティアが多い。そのため、なり手が少なく離職率も高いことが大きな問題となっている。そこで、セネガルの農村部のコミュニティ・ヘルス・ワーカーの選出過程を分析し、活動継続を視野に入れた人材育成のあり方を検討した。その結果、選出にはコミュニティ・ヘルス・ワーカーが女性であること、コミュニティ・ヘルス・ワーカーになろうとする人物の世帯に村での社会的重要な役割をもつものがないことなど、具体的な選出条件が抽出できた。</p>
<b>3. 総説</b>				
1. タイムスタディの研究の進展：タイムスタディによる看護業務の観測と構造化（依頼原稿）	共	2010年12月	看護研究, 第43巻7号, p. 551-557	<p>タイムスタディ研究を実践的研究としてではなく、学問的にも構造化し普遍性の構築に寄与していることを評価され、原稿が依頼された。</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3. 総説				
2. タイムスタディによる看護業務プロセスの可視化（依頼原稿）	共	2010年12月	生体医工学、第48巻6号、p. 536-541	<p>タイムスタディの基本となる時間研究、動作分析を紹介し、これらの統合からタイムスタディを検討した。業務の構造化に関しては業務量と動線に関する研究から特定の現象に注目したタイムスタディ研究の新領域について解説した。オブジェクト指向に基づく業務モデリングの研究やオントロジーによる、業務記録のテキスト部分の検討といった新たな表現技術の導入により、複雑なデータからの知識の抽出が可能になっていくと考える。</p> <p>本人担当部分：共同研究に付き本人担当部分抽出不可能（この論文は特別記事である。研究の立案、研究の実施、結果の考察、文献の調査及び論文作成全般にわたり、実働的に共同研究に当たった） 共著者名：清水佐知子、大野ゆう子、<u>岩佐真也</u>、他5名</p> <p>日本でも数少ないタイムスタディ研究を積極的に行っていることが評価され、原稿執筆の依頼があった。</p> <p>作業測定法の一つであるタイムスタディ調査結果を基に、看護師の患者移送業務の構造を明らかにし、その可視化を行った。また、表現手段としてオブジェクト指向による業務モデリングを行った。その結果、業務責任者の所在と役割が明らかになった。また、広く臨床で用いられている業務手順書と実際の業務プロセスの乖離が示された。さらに、プロセスに時間情報を付加することで業務の稼働率が示され、リスク分析が可能となった。</p>
3. わが国におけるがんの有病者数について：その読み方と生存率・がん登録との関係（依頼原稿）	共	2010年02月	腫瘍内科、第5巻2号、p. 100-106	<p>本人担当部分：共同研究に付き本人担当部分抽出不可能（この論文は解説特集である。研究の立案、研究の実施、結果の考察、文献の調査及び論文作成全般にわたり、実働的に共同研究に当たった） 共著者名：清水佐知子、大野ゆう子、<u>岩佐真也</u>、尾島裕子、林剣煌、富澤理恵、大西喜一郎、本杉ふじゑ、岡田千鶴</p> <p>がん登録において先駆的に研究を行っていることから、原稿の依頼があった。</p> <p>保健統計における有病者数について、その定義と我が国の有病者数および将来予測値を紹介しつつ、その数値を読むときに留意すべき点について概説した。また実際の有病者数の算出においては地域がん登録が資料となるため、その観点から生存率との関連、最近のがん登録における生存率算出の方法であるperiod analysisについても概説した。有病者数は社会におけるがん医療の実態と影響を表現する重要な指標であり、その推計には罹患者名簿とともに予後情報が必須であることを新たな視点から発信した</p> <p>本人担当部分：共同研究に付き本人担当部分抽出不可能（この論文は特集論文である。研究の立案、研究の実施、結果の考察、文献の調査及び論文作成全般にわたり、実働的に共同研究に当たった） 共著者名：大野ゆう子、清水佐知子、堀芽久美、<u>岩佐真也</u>、薄雄斗</p>
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. 教育体制委員会活動報告	共	2017年5月1日	保健師教育 Vol1.1	<p>全国保健師教育機関協議会の教育体制委員会の委員として、会員校の保健師教育課程の教育体制の実態についてアンケート調査を行った。また、保健師教育課程の質を保証する評価基準の作成と公表を行った。さらに、保険費教育課程を看護師課程に上乘せする活動の推進に取り組んだ。</p> <p>本人担当部分：共同活動に付き本人担当部分抽出不可能 共著者名：和泉京子、鮎川晴美、岩佐真也、大森純子、澤井美奈子、土井有羽子、野村美千江</p>
2. 保健師教育課程の質を保証する評価基準について	共	2017年3月1日	保健師教育 Vol1.1	<p>全国保健師教育機関協議会の教育体制委員会の委員として、保健師教育課程の質を保証する評価基準について検討し、教育の対象である学生がよりよく学べる教育体制を含む環境についての質を保証し、整備するために作成した。作成した保健師教育課程の質を保証する評価基準を広く会員へ周知を行うと共に、各教育機関での自己点検評価の実施を促進できるようにつなげていく。</p>



研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等</b>				
3. 国際地域看護研究会活動報告書 20012年度～2015年度	共	2016年5月1日	国際地域看護研究会	<p>本人担当部分：共同活動に付き本人担当部分抽出不可能 共著者名：鮎川晴美、和泉京子、岩佐真也、大森純子、澤井美奈子、土井有羽子、野村美千江</p> <p>4年間にわたる国際地域看護研究会での活動を、活動の概要と日本国際保健医療学会学術集会以て毎年行ってきた自由集会についてのまとめを行った。</p>
4. 日本国際保健医療学会学生部会主題の国際保健トレーニングでの講演	単	2014年03月16日	国立オリンピック記念青少年総合センター	<p>本人担当部分：共同制作に付き本人担当部分抽出不可能 共著者名：森口育子、岩佐真也、神原咲子、坂本真理子、黒瀧安紀子</p> <p>本会の参加者は、将来国際保健医療活動等に興味のある、大学生、大学院生である。国際保健の中でも高等教育の中では十分に触れられることのない集団特有の精神がこめられた伝統医療や、伝統医療が見直されている理由について教授した。また地域に根差した医療活動の必要性や、個人にとって最適な医療を提供することがいかに重要かを論じた。その結果、参加者からは今後途上国を訪れる際や途上国で地域に根差した医療を考える際に、新たな視点を持つ良いきっかけとなったとの評価を得た。</p>
5. 国際地域看護研究会活動報告書 2001年度～2011年度	共	2012年2月1日	国際地域看護研究会	<p>11年間にわたる国際地域看護研究会での活動を、活動の概要と日本国際保健医療学会学術集会以て毎年行ってきた自由集会についてのまとめを行った。主な活動としては、「タイ、中国やスリランカの看護職とのパートナーシップのあり方について」、「インドネシア、カンボジア、スリランカ等のアジア諸国の地方分権と地域看護の動向」、マラリア対策における適正技術開発」、「国際看護教育のあり方と国際看護教育に必要なコンセプト・コアコンピテンシーの明確化」などである。</p>
6. 関西国際保健勉強会での講演	単	2012年07月28日	大阪市立生涯学習センター	<p>本人担当部分：共同制作に付き本人担当部分抽出不可能 共著者名：森口育子、近藤麻里、内海孝子、阿部山優子、岩佐真也、神原咲子、坂本真理子、安藤継子、黒瀧安紀子</p> <p>本会は、国際保健に興味があり知識や経験を身につけたいと思っている人々や、現在は仕事のために具体的に国際協力に関われないが勉強していきたい人のための情報交換の場所である。参加者は医師や福祉関係者、看護師、助産師、保健師、学生と様々であるが、各自の立場で発展途上国の今後を考えられるようにテーマを選択し、セネガルにおける西洋医療と伝統医療を中心に講演を行った。学術的な伝統医療の位置づけを概説すると同時に、現地で生活する人にとっての医療とは何かについて論じた。また、伝統医療も含めた保健医療計画立案の必要性について提案した。</p>
7. The Japan Centre for Evidence Based Practice編集のための翻訳	共	2010年04月から2011年1月まで	The Japan Centre for Evidence Based Practice	<p>本人担当部分：共同制作に付き本人担当部分抽出不可能 共著者名：森口育子、近藤麻里、内海孝子、阿部山優子、岩佐真也、神原咲子、坂本真理子、安藤継子、黒瀧安紀子</p> <p>An Affiliate Centre of the Joanna Briggs InstituteのメンバーとしてThe Japan Centre for Evidence Based Practiceの翻訳作業に従事した。翻訳にあたり、より正確で分かりやすい表現になるように努めた。翻訳したデータを閲覧できるようにWEBを構築した。</p>
8. 21世紀COEプログラム ユビキタス社会における災害看護拠点の形成 看護専門家支援ネットワークプロジェクト活動報告書（平成15～19年度）	共	2008年3月1日	兵庫県立大学大学院看護学研究科21世紀COEプログラム看護専門家支援ネットワークプロジェクト	<p>5年間にわたる活動の概況を綴った報告書である。実際に5年間に起こった災害の職調査を積み重ねる事で、ネットワーク活動の開始から保健師活動の確立までを行ってきた。また、活動を通して多くの看護職に利用してもらえる書式や情報冊子を作成した。特に、初動調査報告用紙、災害時の看護ボランティア活動の知恵袋（日本語版と英語版）は問い合わせも多く、本報告書にもまとめた。災害看護の確立のための有用な報告書となった。</p>
9. 2009年版保健師国家試験問題 解答と解説	共	2008年06月	医学書院 B5版 編集 看護出版部 p. 1-579	<p>本人担当部分：共同制作に付き本人担当部分抽出不可能 編集者：兵庫県立大学大学院看護学研究科21世紀COEプログラム 21世紀COEプログラム ユビキタス社会における災害看護拠点の形成 事務局</p> <p>2007年度の保健師国家試験問題の回答に丁寧な解説を加え、また過去5年間の問題の傾向と解説をつけた国家試験対策本である</p>
				<p>本人担当部分：2008年（94回）保健師国家試験問題 午前「問題16」、「問題17」、「問題18」、「問題22」、「問題23」、2008年（94回）保健師国家試験問</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等</b>				
10. 2008年版保健師国家試験問題 解答と解説	共	2007年06月	医学書院 B5版 編集 看護出版部 p.1-569	<p>題午後「問題7」、「問題8」、「問題9」我が国の保健統計の中でも受療率について概観した。理解を促すために統計の元であるデータの出典を行い、年々変わりゆくデータを単なる暗記物とするのではなく、経過を追って理解できるように執筆した。精神疾患や難病対策といった、法律の改正により支援内容が変わるものについては、基本的考えと歴史的経緯を時系的に解説した。また国家の目指す姿についても触れ、対策の全体像を描けるように記述化した。</p> <p>共著者名：佐々木美佐子、牛尾裕子、<u>岩佐真也</u>、他27名</p> <p>2006年度の保健師国家試験問題の回答に丁寧な解説を加え、また過去5年間の問題の傾向と解説をつけた国家試験対策本である。</p> <p>本人担当部分：2007年（93回）保健師国家試験問題午前「問題13」、「問題14」、「問題17」、「問題18」、「問題19」</p> <p>健康相談時や高齢者の健康づくりを行う際の注意事項、観察ポイントおよび把握事項について、各選択肢の理解の仕方を用例を提示し解説した。また、考え方の基盤となる理論についても概観した。設問の意図を汲み取り理論的思考をもとにした上で、事例の実態に合わせ応用して理解できるように教科書的記述を行った。学生の理解を助けるために、エピソードも書き加え、相談時の様子や健康づくりの企画を行う様子が分かるようにした。解説は項目立てを行い完結にまとめた。</p> <p>共著者名：佐々木美佐子、牛尾裕子、<u>岩佐真也</u>、他22名</p>
<b>6. 研究費の取得状況</b>				
1. 健康の社会格差の視点を包含した社会的弱者に対する保健師活動支援方略の検討	共	2016年4月	文部科学研究費補助金  (基盤研究C) 平成28-30年度	保健師の社会的弱者の健康についての認識と社会的弱者への保健活動の必要性についての認識、実際の活動内容の現状を明らかにし、健康の社会格差の視点を包含した保健師の活動支援方略を検討することを目的とする。本研究は、2段階で構成し、1段階目は、保健師へのインタビュー調査による、保健師の社会的弱者の健康についての認識と社会的弱者への保健活動の必要性についての認識、実際の活動内容の把握である。2段階目は、1段階目の調査より明らかになった内容を基に作成した質問用紙を用いた、全国市区町村保健師への社会的弱者に対する活動実態を把握するための悉皆調査である。本研究は社会的弱者に焦点をあてており、得られた研究結果を全ての住民を対象とする市区町村の保健事業の健康格差をふまえた展開に役立てる。 <p>助成金：380万円 研究代表者：岩佐真也 分担研究者：和泉京子他4名</p>
2. 低所得未受療国保健診未受診者の家庭訪問での実態把握とKDBシステムによる訪問評価	共	2015年4月	文部科学研究費補助金 (基盤研究C) 平成27-29年度	国保加入者における低所得で未受療者に対し家庭訪問を行い、身体心理社会的健康状態および生活状況、健康行動の実態を明らかにし、訪問による支援の効果をKDBにて評価する。 <p>現在は、低所得者への家庭訪問を実施している。</p> <p>助成金：370万円 研究代表者 和泉京子 分担研究者：岩佐真也、海原律子、阿曾洋子、上野昌江、内藤義彦、川井太加子</p>
3. 発展途上国における持続可能な保健医療システム構築のための方法論の開発	単	2009年2月	阪大学大学院博士後期課程 短期研究留学助成金	本助成金は大阪大学独自のものであるが、海外での研究活動を志望する多くの大学院生が募集するもので、その採択率は非常に低く難関といわれている。しかし、4ヶ月の海外研究の機会を獲得した。事前準備としての調査表作成から積極的に取り組んだ。採択された研究テーマは「発展途上国における持続可能な保健医療対策のあり方に関する方法論の開発」である。留学では、西アフリカにあるセネガル共和国の保健予防省保健局民間医療・旅行医学・伝統医療課の研究生として、セネガルの保健医療行政を学んだ。それと同時に、地域住民の生活実態調査と受療行動調査を実施し、持続可能性をキーワードに分析を行った。この研究は博士学位論文にもつながった。 <p>助成金：104.7万円</p>
4. 発展途上国におけるプライマリヘルスケア実現のための保健医療システムの在り方	単	2003年8月	独立行政法人国際協力機構 国内長期研修員助成金	本助成金は、専門家等として開発途上国において直接国際協力に従事する人材の養成と確保として行われている。こうした人材養成の一環として、我が国が開発途上国に派遣する技術協力専門家等として将来にわたり活躍することを志向する方々を対象に、

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>6. 研究費の取得状況</b>				
				海外あるいは国内の大学院における研修（原則として修士課程における学位取得）を通じた専門能力のさらなる向上を支援するものである。この助成金を受け、インドネシアとセネガル共和国において妊産婦調査や公衆衛生に関する調査を行い、発展途上国におけるプライマリヘルスケア実現のための保健医療システムの在り方について研究した。この研究は修士学位論文にもつながった。 助成金：120万円

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2017年3月まで	日本健康科学学会
2. 2017年1月	第48回日本看護学会慢性期看護学術集会抄録選考委員会委員
3. 2016年9月	第15回日本アディクション看護学会学術集会にて実行協力員
4. 2016年6月～現在	兵庫県看護協会看護実践研究会企画委員を担当
5. 2016年6月～現在	一般社団法人全国保健師教育機関協議会教育体制委員会委員を担当
6. 2016年3月まで	日本行動科学学会
7. 2015年4月～現在	茨木市介護認定審査会委員を担当
8. 2014年10月から現在	日本国際保健医療学会 代議員
9. 2013年10月～2014年6月	WYS教育交流日本協会の依頼を受け、外国人交換高校留学生の支援としてホームステイの受け入れを実施
10. 2009年9月	青年海外協力応募促進支援活動員
11. 2007年8月	第1回世界災害看護学会事務局実行委員
12. 2005年7月	第7回日本災害看護学会 事務局の一員
13. 2005年4月～2008年3月	国際地域看護研究会 事務局長
14. 2004年3月	第22回日本国際保健医療学会西日本地方会事務局
15. 2000年8月から現在	自分自身の考えを言語化できるような国際理解教育 日本国際保健医療学会会員 日本公衆衛生看護学会会員 日本健康学会 国際地域看護研究会会員 西宮市保健所管内保健師研究会会員 日本地域看護学会会員 日本公衆衛生学会会員